資料紹介

日本人旅行者の見た南京市街：清末～1920 年代

荒武 達朗

はじめに

太平天国のもたらした江南社会の荒廃については既に多くの研究が述べている。2006 年以来の科研プロジェクトの研究対象である南京について言えば、1853 年の太平天国軍による攻略、その統治、内紛、1864 年の清軍による奪回という過程の中で、甚大な人的被害、街区・建築物の破壊が進んだ。ニューズレター5 号所収の拙文「満鉄上海事務所調査室の南京不動産慣行調査」で明らかにしたように、南京の土地調査・登記事業で土地家屋の所有権の根拠となる契拠（旧契約書）は太平天国より前に遡るものが極めて稀であり、ほとんどが乱平定後の同治年間の善後総局が発行した「執照」以降のものであった。

本稿は上記プロジェクトのメインテーマである南京市の土地調査・登記事業開始前の街区の姿を点描することを目的とする。太平天国後の江南社会の研究に関しても、史料収集を含めれば数多くの研究蓄積がある。南京を対象とした代表的なものとして、南京市地方志編纂委員会辦公室の編纂による、夏維中・張鉄宝・王剛編『南京通史・清代巻』（南京出版社、2014 年）が近年刊行された。その第九章「晩清江寧的恢復与発展」は太平天国後の南京の復興について詳述し、時期ごとの各種政策の概要を大略明らかにしている。しかしながらそこから実際の南京市街の様相はどうであったのかは依然よく分からない。ある政策や事業が実施されたとしても、その下でどれほどの変化がもたらされたのかは具体的には判明しない。そこで本稿では、日本人が書き記した旅行記に基づいて南京市街の状況を再現することに努める。観察者として訪れた者はその見聞したところを記録するが、その記事には当地の居住者にとって書くに値しない常識的なことが書かれている場合がある。日々の暮らしを営む者がその住む街の姿を書き留めることは稀であろう。その点で外部の訪問者による記録には史料的価値がある。なお無論、日本人以外の外国人や南京外の中国人も南京で自ら目にしたところを書き記しているが、これについては検討していない。時期は日本人旅行者が訪れるようになった 19 世紀末から、南京国民政府による統治が本格的に始動する 1927 年までを対象とする。主として南京の街区に関する記事を抽出し、ここから市内の情況を見ていくことにしたい。言わば我々のフィールドの“雰囲気”をつかみたいというささやかな試みである。

使用する史料は全て旅行年順に配列し【史料〇〇】として番号を振り、本文中に引用した箇所を含めて関連する記述はすべて本稿の後半に掲げている。また本文中に引用するに際しても史料の刊行年ではなく旅行年に基づいて記述し、書誌情報は後掲の史料に明示することとする。

本稿では南京市内の地名が幾つか登場するが、理解を進めるために 3 枚の地図を提示する。1 枚目は 1898 年にフランス人宣教師 Louis Gaillard が作製、刊行した『江寧府城図』

である[1]。この地図には 1908 年までの旅行記に登場する主な地名を掲げた。これは本稿での〈Ⅰ-a　清末(1)〉の時期に相当する【図 A　江寧府城図】。1908 年 12 月に下関より城内の中正街まで寧省鉄道（城内鉄道）が完成し[2]、1910 年 6 月から 11 月にかけて城内で南洋勧業会が開催される[3]。旅行記にもこれらに関する記述が登場するようになるので、鉄道敷設の 1908 年以降については別の地図を用意した。この 2 枚目の地図は 1910 年 6 月に日本堂書店から刊行されたものである。『南京全図』と標題が付けられており、日本人旅行者が利用したと考えられる【図 B　南京全図】[4]。図の左下には日本旅館宝来館の広告が載っている。この宝来館は旅行記にもその名前をしばしば見ることができる。右下には南洋勧業会の会場案内図が掲げられており、この地図が当博覧会を目的に訪れた旅行者の便を図るために刊行されたということが見て取れる。残念ながら 1912 年の中華民国建国以降の地図は筆者の手元に適当なものがない。それ故この地図を以て 1920 年代までをカバーすることとする。本稿の区分で言えば〈Ⅰ-b　清末(2)〉、〈Ⅱ　民国期(1)〉、〈Ⅲ　民国期(2)〉の時期が該当する。3 枚目の地図は国民政府時期の 1928 年 8 月に修正・刊行された『最新首都城市全図』であるが、本稿の対象とする時期以降に当たるので、参考程度に掲げることとしたい【図 C　最新首都城市全図】。

Ⅰ-a　清末（1）：～1908 年

まず 1908 年頃まで、つまり寧省鉄道と南洋勧業会開催前後までの南京市街の状況を見てみよう。旅行者が記録を残す以前について、先行研究がしばしば引用する史料であるが、太平天国後の南京の復興は遅々として進まなかったことが読み取れるものとして、1881 年に両江総督の任に就いた左宗棠が次のように述べている。

> 江南の奪還より二十年たったが、街は寂れており、四方の野原は拓かれず、強盗案件はしきりに耳にする。南京は先には貿易港ではなく人家はまばらであったが、近頃もあばら屋に廃墟、荒れ草が一面にあり、不作の年ではなくとも施しを待つ者が常に二万数千人あまりもいる。これを四十年前の光景と比べれば、明らかに大きな落差があるのだ。[5]

---

(1) 老地図・南京旧影シリーズ。南京出版社、2012 年。

(2) 夏維中・張鉄宝・王剛編『南京通史・清代巻』南京出版社、2014 年、p.503。

(3) 同上、第九章第六節第五項「南洋勧業会」。

(4) 老地図・南京旧影シリーズ。南京出版社、2012 年。

(5) 侯風雲「戦争対近代城市発展的破壊性影響：以太平天国戦争対南京的影響為例」『中国国家博物館館刊』2011 年 10 期、p.129 所引の『左文襄公全集・書牘』巻 25（『近代中国史料叢刊』続編、文海出版社、1979 年）、3570 頁。

【図 A　江寧府城図】

1894 年に両江総督に着任した張之洞も 1895 年に次のように南京の状況を記している。

南京の平定より既に三十有余年、活気は今に至るまで恢復せず、人々の暮らしは消沈

しており、街には空地が目立ち、少しも振興の機会が存在しない。
南京城内の空地の拡がりはあまりに甚だしく、戦乱以来店舗は寂れ、城内に人の住む所は三分の一、空地は三分の二である。(6)

戦後四十年近くが経過した1880-90年代においても荒廃から未だ恢復していないことが窺い知れる。城内の内、戦禍を免れ市街を形成していたのは三分の一に過ぎなかった。この部分には本プロジェクトの対象地域である秦淮地区が含まれる。市街地が残存していたにせよ、先述した通りこの地区の土地登記文書の中に同治年間より前に遡ることのできる契約文書は殆ど見出せなかった。土地・家屋が戦禍を被らなかったとしても住民の避難、死亡による土地・家屋所有権の混乱は避けられなかった。後の民国期の記述であるが、1920年代になっても南京に生きる人びとの間では太平天国の記憶が語り継がれていたようである。なお、本稿以下での史料引用に当たっては、引用者が適宜に句読点等を加えている。

1924 年 4 月「案内者の柳さんは日本語は可成り達者で、其処此処に立止まっては、慷慨して当時の史話をやる。彼は祖父から時折り聞かされたのださうで、長髪賊の入城当時の惨状は小供心に深く刻んで居ると云ふ。」【史料 36】pp.81-82

これは今の我々が 70 年前の戦争を語るのと同じ様な感覚なのかもしれない。民国期において太平天国（長髪賊、長毛賊）の記憶は完全に消え去った過去のものではなかったのである。

管見の限り南京についてまとまった記述は、1890 年頃の市街を描写した【史料 1】が最も初期の一つである。

1890-92 年「周囲殆んど十四里、人口凡そ四十万とす。其郭壁の高さ五丈より七丈に至る。外部に城壕あり。総て明の洪武年間に於て創建する所に係る。其規模広大民物繁盛の地たり。然るに咸豊年間長毛賊の占領する所となり、為めに城内三分の二は殆んど荒蕪に帰したりしも、近年左宗棠総督となり、大に家屋を建築せしめ人烟更に増加し来り。」【史料 1】p.68

この城内三分の二が破壊されているという描写は先の張之洞の報告とも共通しており、その当時の情況を表したものとして、広く受け入れられていたと考えられる。さらに【史料 3】1895 年 12 月、【史料 8】1901-02 年頃にも同じ様な記述があるが、おそらくはこの【史料 1】を参考として著されたものであろう。この記事は 1881 年両江総督の地位に就いた左宗棠によって再建が進められたとしている。以下提示する【史料 7】によれば、左宗棠

(6) 同上所引の『張文襄公全集・奏議』巻 41（『近代中国史料叢刊』正編、文海出版社、1979 年）、2904 頁、2987 頁。

の約 10 年後、1894 年に任に就いた張之洞の下で南京市の道路建設などの事業が進められた(7)。

> 1901 年前「下関より城内に通ずる幹道は路傍植ゆるに柳樹を以てし、幅約四間、坦々として車馬を駆るに便なり。今夏長江氾濫の浸水を蒙り、数カ所の破壊を見るに至りたるも、目下減水と共に修理に着手しつつあれば、其復旧遠きにあらざるべし。蓋、外人の初めて支那に来るもの、其道路の粗悪に驚かざる稀なり。而して南京の如き開港以前に於て而かも居留外人少く、随って其刺撃多からざるべきに、早く既に馬路の開通を見る。寧ろ意外の感無き能わず。聞く、七年前今の湖広総督張之洞が両江総督の署理たりし時、巨額の資金を費やし此工事を起したるものなりと云。」【史料 7】pp.92-93

張之洞の下で道路建設の面では幾分の発展が見られたと言うが、先述の通り左宗棠、張之洞ともに南京の荒廃を述べており、復興が完全には進んでいなかった。

以下、市街地の地域的拡がりについて見てみよう。

> 1902-02 年「市街は現在僅かに西南の一少角を占め、全面積の大半は田園或は荒蕪の地多し。」【史料 6】p.124
> 1901 年前「現今の市街は僅かに城廓内西南の一角を占め、他は荒原若くは田畝と為りて存するのみ。」【史料 7】p.93

このように市街地は城内西南の一隅に残存するばかりであった（ほかに【史料 10】1906 年 7 月参照）。鼓楼より北部については、次の【史料 11】、城内の北、玄武湖の南にある北極閣からの情景がその雰囲気を表している。

> 1908 年 12 月「この近くにある北極閣は今軍隊の駐屯する処だが、ここに昇れば眼界は前より更に広い。揚子江に遠く霞んで海のやうに、思ひさま水を湛へて居る。ここから見ると南京の市街の無暗とだだびろいのが知れるのである。……。」【史料 11】p.72

北極閣から見た南京市内は「無闇とだだひろい」空間が広がっていた。

引き続き南京市内のそれぞれの地点の記事を提示する。清末の特徴として、大報恩寺の磁製塔の破壊について言及する史料が多く見られる。例えば【史料 2】【史料 4】【史料 6】【史料 7】【史料 13】【史料 16】がその例である。その内の一つ【史料 6】を紹介する。

---

(7) 前掲『南京通史・清代巻』第九章第二節「戦後的市政建設和公共事業」。

1900-02 年「嘗て名を世界に恣にせし磁製塔の如きは、其形八面八稜、九層を重ね、高さ二百六十一尺、外面を覆ふに五彩の磁板を以てせり。これ元の東晋簡文帝の創建する所にして、明の成祖之を再建し、十九年の星霜を経て落成せしものなりしも、此時に至り完く破壊され、今は僅かに破瓦の草間に埋没するあるのみ。」【史料 6】p.124

また明の故宮の荒廃についても言及される。代表的なものを以下に提示する。

1899 年 11 月「翌十七日朝は杉山・平岡二君に導かれて、考陵に詣づ、路は照心橋を渡りて西華門より内城に径す。内城は明の故宮の在りし処にして、今は駐防八旗の居る所たり。髪賊の乱後、荒廃を極め、頽垣修めず、御溝空しく流留る。」【史料 5】p.165

1906 年 7 月「記者は明の故宮を経、其の附近の民屋が断礎廃甎によりて出来つつあるを見て、其の一片が、大いなる且つ多くの物語を、含有する事を感じ候」【史料 10】pp.178-180

故宮の西側には駐防八旗の所在地（所謂、江寧満城）が隣接している。ここは後の辛亥革命によって徹底的に破壊されることになるが、旅行記にはほぼ印象なく触れられているに過ぎない（【史料 5】1899 年 11 月、また後に引用する【史料 14】1906-10 年）。貢院は、1903 年の時点では試験直後故に中に入ることは出来なかったが、まだ健在であった。

1903 年 10 月「貢院の内部は是非共一見せまし考へなりしも、当時試験の済みし許りにて、調査の結了する迄は、一切人の入るを許さず、門には堅く封印をさへ施したり。」【史料 9】p.72

だが、やや後の民国期の史料であるが、科挙廃止後十数年、民国成立後 10 年も経たぬうちに貢院の荒廃と破壊が進んでいたことが読み取れる（ほかに【史料 35】など参照）。

1917 年 11 月「貢院の一半は、已に壊廃して、圃となり居れり。他の一方も、恐らくは数年を待たざる可し。」【史料 20】p.226

1919 年 10 月「明代の貢院は長髪賊の兵火に失せ、今のものは同治三年の修築に係り、元は二万六百四十四の号舎、亡慮二万人以上の受験生を収容し得たりと謂はるれば、此の長屋型の長棟は本来は二百棟以上も存在したる筈で、之が行はれずなりて後漸次取り毀たれ、現に其半部分の受験生を収容すべき棟々は今や悉く売り払はれて居る有様。」【史料 25】p.256

さて、南京を訪れる旅行者は、長江沿いの下関に上陸した後に儀鳳門より鼓楼方面へと向かう。この道路は先述の通り張之洞の下で修築されたものである。清末から民国期にか

けて数多くの旅行者がここを通り、その印象を書き留めている。まずその最も初期のものとしては内藤虎次郎の手による【史料 5】が挙げられる。

> 1899 年 11 月「南京が帝都の実を失へること四百余年、加ふるに近歳長髪賊の大乱を経たれば、城内は荒れに荒れて、馬路の両側にだに人家の聯続せるは罕れに、田疇竹樹、犬牙交錯して、村落の間を行くが若し。本願寺に至る一路、唯だ鼓楼の衢に当りて壮大空を衝くのみぞ、往事帝都の名残なるべく覚えて、其の附近には北極閣の寂しげに立たる下に、西欧宣教師の住宅特に目立て見えたり。」【史料 5】p.164

ここには人家は殆ど無く、田野の中を行く光景が描かれている。この情景はⅠ-b、Ⅱ、Ⅲの時期へと引き継がれていくが、後になるとその間に領事館や政府機関が建設される様が看取される。そしてこの 1899 年の旅行者は、宿舎である本願寺学堂の所在する科巷より南へ足を向け次のように述べた。

> 1899 年 11 月「この日午下、農商務・三井の留学生達に伴はれて南京の最盛市街たる三山街あたりを観たり。科巷よりは亦半里程もあるべし。」【史料 5】p.165

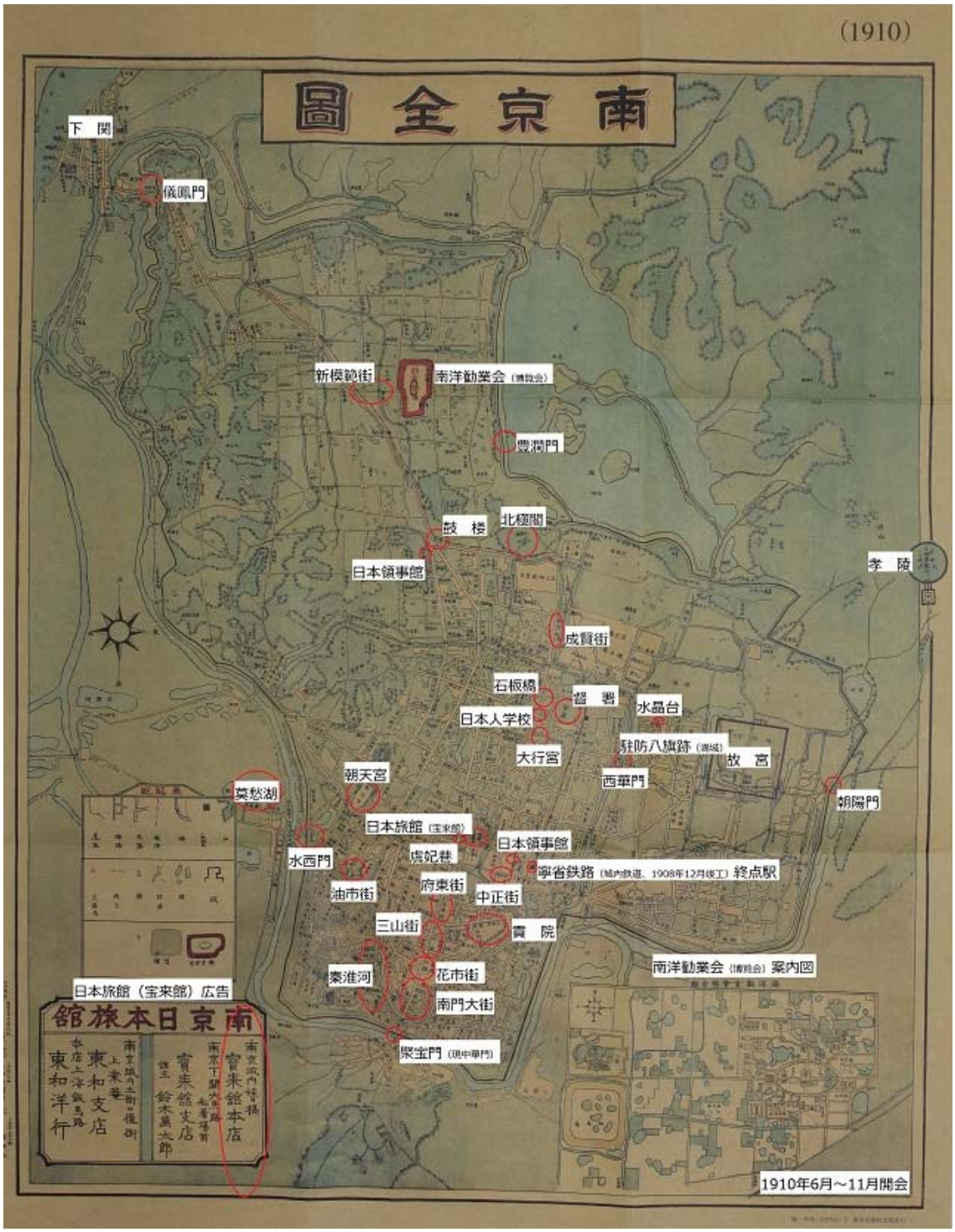
具体的な市街の状況は分からないが、市の南部の三山街一帯が最も繁華であったと報告されている。

<u>Ⅰ-b　清末(2)：1908～1911 年</u>

1910 年に南京を訪問した旅行者は下関に上陸した後、儀鳳門を通って城内へと向かう道の印象を次のように表現している。

> 1910 年 5 月以前「髪賊の平定後茲に四十余年、城内約四分の一は再び人家を以て充たすに至りたりと雖も、旅行者若し南京港に上陸し馬車を駆りて城内に進まば、数哩の間田畝竹藪相交り瓦礫累々として、実に寰外の概あるを見る。詩人此地を以て京都の秋色に奈良の古色を加味したりと云ふも過言にあらざるなり。（中略）然れども最近数年間南京に於ける進歩発達は著しく、滬寧城内の二鉄道が完成は、交通上の至大の便宜を与へたるのみならず、道路の改修、警察の設備等面目を一新せり。将来電燈水道の設備成り、津浦鉄道完成の暁は長江岸に於ける重要商港たるに至るべし。」【史料 12】pp.19-20

Ⅰ-a の時期と同様、田園の中を行くかのような光景が目に映る。一方で 1908 年 12 月の寧省鉄道の敷設、加えて道路建設などにより都市の外観が変わっていくという期待も述べられている。



【図 B　南京全図】

【史料 13】は 1910 年に開催された南洋勧業会を訪問した旅行記である。この史料は南京各所の情景を活写しており興味深い。以下、幾つかの部分に分けて検討するが、まずは他の旅行者と同じく下関から儀鳳門から市の中心鼓楼まで馬車で行く。

1910 年 8 月「城内に入れば、街路は平坦で、幅四五間ある。全く田舎の景で、楊柳高く両側を蔽ひ、又竹藪などもある。……。やがて左方に博覧会場が見える。又城内鉄道の列車の通過するのを見て、柳の並樹の路を進めば、城内の中央の稍高き地に大なる鼓櫓のある処に出た。その高さ十数間左右六七十間。三つの洞門があって、その上に二層の城楼がある、全城内を見渡すべく。その昔の俤を偲ぶに足る遺物である。その右隣の地に、略落成したる大厦が日本領事館である。……。鼓櫓の次は、支那風の市街をなして居る。併し上海旧城内よりも稍広闊で、道幅が三間位ある。総督の居る都府であるからであらう。商家が表に高き柱を立て、之に看板（牌）を幾段にもかけるなど珍奇である。車上で看板を読みながら行くになかなか興味がある。」【史料 13】pp.86-89

鼓楼への道のりは他の記録とさほど変わらない。横を寧省鉄道の汽車が通っていくが、彼は馬車に乗って市内へ向かった。鼓楼の旁らには新しい日本領事館が建設中であった。この時点においても南京市街は鼓楼より南側に広がっていた。「看板を読みながら」とあるので、商家の立ち並ぶ商業区もこの部分にあったことが分かる。そこから更に南へ中正街の領事館へと向かう。

「進むに従ひて、官吏の居宅多き処に入る。官吏の邸宅には福州劉公館（福州出身の官吏劉氏の家の意）などと記し、四面皆石垣を廻らし、その中に家を構へてある。遂に中正街の日本領事館に至る。時に午前八時。茲は市街の中央ではあるが、総督の官庁（督署）に近くて、官吏の邸宅多く、東京の山の手の趣がある。領事館は樹木蓊鬱たる中にある。下関より二里。……。」【史料 13】p.90

商業区域を抜けると官庁街がある。おそらくはそこは督府及びその南側にかけての一帯であろう。そしてさらにその南の中正街は寧省鉄道の終点もあり、街の中心地とも言えるところである。雰囲気は山の手に似ているという。続いて市街の西側に目を転ずる。

「莫愁湖は不忍池の二倍許の湖である。……。暫にして楼を出でて腕車に乗り、水西門を入る。此辺は南京繁華の中心にて、大厦両側に聳え、肩摩轂擊の有様である。……。秦淮河は、秦の始皇帝が東巡の時、望気者の言を用ゐ、王気を洩導するために掘り割りたりと伝へらるるもので城内を通じて居る。幅は僅かに十間内外であるが、料理店・青楼などその両側に並び、画舫とて、彩色し幔幕を張り彩燈をつるしたる遊船が多く茲にある。……。」【史料 13】pp.115-117

この水西門の城内側、秦淮河の近辺は人の居住も多い。後の記述、1924 年 4 月の【史料 36】によればこのあたりは浅草に似ているという。先の記述の三山街を併せた一帯が南京城内で最も繁華である。我々のフィールドは秦淮河の南側に位置しており、この部分に含

まれている。この「画舫」という遊覧船に乗って遊興する記事は、旅行記全体に数多く目立っている(8)。この旅行者は督府近くの停車場から鉄道に乗って博覧会へと向かった。

「かくして場内〔※博覧会場内（※は引用者註。以下同じ）〕で三四時間を経過し、東北方面を見んとして東側門から出でんとして、門を出づるや、……。偖これから全く田舎の景色である。猛犬が道を遮って吠ゆるのには辟易した。風物自ら寂寥で、心細く感じた。竹藪など多き処を通り、五六町で大城郭に出た。茲に豊潤門といふ近頃開いた門がある。日没近く旅館に帰れば、内山書記生が待って居られた。晩餐を共にして、夫れから車を列ねて博覧会の夜景を見るべく出発した。……。博覧会西門前の新設模範市街は、或上海富豪の建てたるもので、幅十五間許の道路の両側に、四五町間立派なる市街がある。非常に雑沓して居った。」【史料 13】pp.94-95、pp.115-117

参観後、東側から会場外へと出た。城内とは言えその一帯はまるで農村であった。会場の東、玄武湖側にはこの博覧会の来場者の便を図るために豊潤門という新しい門が開かれていた。一方西側には新しい街区が建設されつつあった。ここが現在の新模範街である。「雑沓」とあるが、これは南洋勧業会の入場者によるものだろうか。

以上清末時点での南京市街は城内の南西のみ市街の様相を呈していた。故宮の一帯が完全に破壊された様であったことは既述の通りである。この時点では駐防八旗の所在地（江寧満城）は次の史料にもあるように健在であった。

1906-10 年「南京城の東、満城を横ぎり満洲将軍衙門を過ぐれば、附近一帯には隴圃の間に残礎累々として居る。……。」【史料 14】p.311

この江寧満城は続くⅡの冒頭にあたる辛亥革命において完全に破壊されてしまう。

Ⅱ　民国期(1)：1910 年代

南京市街は 1911 年の辛亥革命の戦禍を被った（【史料 20】【史料 21】【史料 23】【史料 24】【史料 29】【史料 30】【史料 31】）。続く 1913 年にも第二革命が発生し、南京市街にもその被害が及んだ。この内【史料 20】【史料 21】を例として提示する。徳富猪一郎は南京を二度（【史料 10】1906 年 7 月、【史料 20】1917 年 11 月）訪問している。その二回目の訪問時の記録が革命による都市の被害について触れている。

1917 年 11 月「南京は予が十二年前の曾遊時に比すれば、更らに再度の劫運を経たり。第一革命の際には、張勲堅守の後、革命軍に占領せられ、新政府は此処に其基を定め

(8) 画舫をはじめ秦淮地区の遊興空間については太平天国以前の状況が中心であるものの大木康『中国遊里空間：明清秦淮妓女の世界』青土社、2002 年が参考となる。

たり。第二革命に際しては、馮国璋に攻略せらる。……。但だ市中荒涼の情態は、遠客の一瞥にも、容易に看取せらる。」【史料 20】pp.216-217

「市中荒涼の情態は、遠客の一瞥にも、容易に看取せらる」というように、革命後数年が経過した 1917 年の時点で、その傷跡が目についたと述べている。戦禍による被害の中でも旅行者の目を引いたものが前節末で言及した江寧満城に対する破壊であった。中華民国成立直後の 1912 年 8 月に南京を訪れた旅行者、前田利定の記録からその光景を見てみよう。

1912 年 8 月「革命の兵火　江寧将軍として時めきたる鉄良の住みしといふ衙門は革命の鉄火を浴みて一樹一木をも残さず焦土に帰し、唯土塁残壁の寂然として崩れ立つのみに候。威を江南に振ひたりし将軍衙門に続きて八旗の将士の家居したりし士族町今将た何処にかある。栄枯定めなきは世の常とは申し乍ら儚く感ぜられ申候。」【史料 15】p.50

衙門のみならず住居も全て灰燼に帰してしまった。この情景は多くの日本人旅行者に衝撃を与えたようであり、【史料 15】以外にも【史料 21】【史料 26】【史料 30】【史料 32】の旅行記に言及されている。

続いて南京の各所の情況を見ていくこととする。同じく前田利定の【史料 15】は、南京の入り口である下関について次の様に述べている。

1912 年 8 月「下関とは南京城外揚子江畔の地方を申すにて、南京唯一の商埠に御座候。戸数は二千に近く人口一万を超ゆる由に御座候。南京城門は午後九時より午前六時迄閉鎖せらるるを以て南京に来往する旅客は此の地に宿泊し、或は乗船入城の便を計らざるべからざるよりして多数の旅館料理店などあるは勿論のこと、西洋雑貨を営む店など年々に殖え、十年前に比すれば頗る繁盛を来せるものの由、将来津浦鉄道完成の暁には滬寧・津浦両鉄道旅客貨物の接続地として益将来は繁栄に相成なるべくと想像致され申候。浦口は長江を隔てて下関と相対し、人口は六千許りもありて商業稍殷盛の趣に御座候。」【史料 15】p.58

この旅行者は 10 年前にもこの地を経過したことがあるが、その時に比較すると下関の街は発展していたという。これに対して下関から鼓楼へと向かう道筋は、鉄道・馬車のどちらであっても革命前と変わらず全く田舎の光景であった。

1913 年 3-4 月「又、古を存する無く、城壁の中には、山もあり、田もあり、畑もあり、下関と云ふ処から寧省鉄道に乗って、市の中央に往かうとすると、は、恰も平原と云っても可いほどの有様であります。……。又、今日では、まだ水道の設けなき為め、

水の不潔なのには、大分苦しめられたやうであります。」【史料 17】pp.63-64

1914 年 8 月「城内に入れば、直に都城の壮観に接するものと思ひきや、全く蕭條たる田舎の景色で、更に人家を認めない。例の楊柳、道の両側を覆ひ、処処竹林や草澤を見る。特に道の左方は茫茫たる原野で、木の葉越しに宏大なる南京博覧会の廃址が見える。」【史料 18】pp.104-105

ただし 1910 年代の半ばにはその光景に幾つかの変化が見られる様になった。

1916 年 1 月「楊樹の並木の続いて居る道を一路南に進むと其処に南京の街がある。私達は、街に続く寂しい道を南へ南へ進んだ。此道は清朝時代の総督張之洞が築造したのだと聞いて居るが、両側には所々に大きな建物を見るきりで、殆ど村落を行くの感がある。」【史料 19】pp.2-4

この“大きな建物”というのは、次に示す史料に依れば各国の領事館及び学校と政府機関を指している。

1920 年夏頃「馬車は儀鳳門を潜る。さて城内だ。と言ってもこの広大な城壁内区域は直ちに市街を形成してゐる訳ではない。郊外景色の中を、柳林に包まれたこの平坦な一條の本道が走ってゐるまでである。下関からの支線なる江寧鉄路も走ってゐる。各国領事館は思ふ存分、樹と草とに包まれ切った広域を占めて点在してゐる。」【史料 27】pp.263-264

1920 年代が始まる頃には、この道筋に各国の領事館が広い敷地を区切って建てられていた。先にも引用した徳富猪一郎の【史料 20】は郊外の孝陵に至る道の完成を報告しており、これが 12 年前（【史料 10】1906 年 7 月）と比べての大きな変化であると述べる。

1917 年 11 月「予が十二年前、孝陵に遊びたる節は、轎に乗りたれども、今は馬車にて陵下迄来るを得たり。是れ一に民国政府の賜也。革命後の成績としては、道路の修理を以て、第一に措く可きが如し。」【史料 20】pp.220-221

以下、市街の情景を点描していこう。次の【史料 18】は 1914 年 8 月に鼓楼近くの北極閣から眺めた描写であり、南京のどこに街区が形成されていたかを読み取ることができ、興味深い。

1914 年 8 月「凡そ北極閣から北と西の部分は人家殆ど無く、一面の平野に沼澤が甚だ多い。雨ふれば即ち此等の沼澤が溢れて、一面の海と化するさうで、太古は揚子江の水が、今は市中を横断して流れたものと云はれて居る。北極閣山上より南を望めば

人家櫛比して城壁内に溢れ、縦横に通じたる溝渠は、如何に運輸の便あるかを想はしめる。此方面兵営あり、学堂あり、官衙あり、皆歴歴として望むことが出来る。……。左の方朝陽門内に荒台残礎の散見するは、明の故宮址で、此朝陽門こそ、第二革命に当り、張勲が某国宣教師の力を藉り、城兵をして門を開かしめ侵入した処である。双眼鏡により、朝陽門外石人石馬の駢列するを認めることが出来る。即ち明の孝陵へ到る道である。朝陽門より右、市街の南端なる門が聚宝門即ち南門で、門外には造幣局、火薬局等の煙突を見、更に南して雨花台を望むべく、門内秦淮河に臨める夫子廟の赤い甍を認め、それより少しく眼を右に転ずれば朝天宮が九衢を圧して聳え、甍越しに莫愁湖の水光を望むのである。」【史料 18】p.108

城内北部と西部は沼沢地であり、人家はほとんど無い。南側は人家が建ち並んでおり、更にその南に官庁街がある。これは先述の通り督府の近辺を指すと考えられる。南東方面、故宮を見渡すことが出来るが、ここは廃墟であった。聚宝門（現在の中華門）の城外には工場が建っていた。朝天宮、夫子廟（貢院隣り）なども見渡せるので高い建物がまだ存在しないことも読み取れる。次の【史料 22】によれば、この南側の三山街、南門大街の一帯は繁華であり、それに加えて秦淮の一帯が、清末と同様に賑やかであったことが分かる。

1919 年 1 月「然れども其後数次の兵燹により、今や城内多くは荒廃に帰し、南門街、三山街等西南の一隅を除くの外、雑草離々、風物粛條として転た行人を愁しむ。」【史料 22】p.107

ただし全体としてみるならば、「三山街、南門街等西南の一隅」を除けば、1910 年代を通しても南京城内の荒廃は明らかであった。1912 年の前出の前田利定【史料 15】は次のように述べる。

1912 年 8 月「承る処に依れば周囲九十六清里、十三門、外域は百八十清里、十六門有之由にて、其規模の雄大なる誠に王者の地たるにふさはしき大都に候へ共、長髪賊の兵燹に罹りたる為めか荒蕪を極め、北部四分の三は恰も村落の間を行く如く、田園樹林連亘して所々に燈光の点々と見え、都城の中を行き居るの感無之候。」【史料 15】pp.42-43

辛亥革命後の南京もまた概して北部の四分の三は「所々に燈光が点々」と見える程度で都市の中に居る感はなく、あたかも村落の中を往くようであった。その 6 年後、1918 年の【史料 21】には次のように記されている。

1918 年 4 月「殺風景な宿の一室に閉ぢ籠もって、つくづく南京の現状を頭に浮べてみたが、映ずるものは只荒廃と荒蕪と丈である。秣陵の昔、金陵の昔は曰はずもがな、

清朝の末、張之洞の学問地として一時教育の中心地となったその俤さへも今は見ることは出来ない。革命に続ぐに革命を以てした。その革命は常に破壊であった。破壊のあとは荒廃である。壁といふ壁、石といふ石、悉く打碎かれて今は見るよしもない。」【史料 21】pp.119-120

さらに 1920 年、辛亥革命後約 10 年が経過した時点でも、ある旅行者はその荒廃を次のように嘆じている。

1920 年 6 月「荒廃の惨状　然り、北極閣の荒廃固より然り。然れども是驚くべきにあらざるなり。驚くべきは南京其ものの荒廃のみ。余の未だ南京を訪はざるや、脳中画くところは其繁盛と其雄大と其優美となりき。然りに今来れる処は城内の地たるに拘らず、道路の両側は竹林のみ、田野のみ、路は坦々たらざるにあらず、路傍楊柳の風に紊るるの趣致なきにあらずと雖も、点々たる家屋の間、農桑に忙はしきの人多く、之を都市といふべからずして、寧ろ田園と称するの優れるを思はずんばあらず。常に兵乱の中心となり、長髪賊の乱後未だ回復せざるもの、更に清末革命の禍殃に会す。殆ど全都三分の二の廃墟となり、人口三十七万を数ふるに過ぎざるに至っては、衰頽の状、真に驚くべきなり。津浦線の開通、果して能く幾何か其繁栄を回復し且之を増大すべき。」【史料 26】pp.282-283

南京の繁華を予想していたのだが、それが外れたという記述は他の旅行記にも共有されている（後述の【史料 32】1922 年春～夏）。以上が 1910 年代の南京市街の雰囲気であった。

Ⅲ　民国期(2)：1920 年代

ここでは 1920 年代、おおよそ民国 10 年代の南京市街の情況を概観する。まず初めに旅行客が南京城内へと向かう、儀鳳門から鼓楼へと至る道の情況を確認しておきたい。

1921 年 5 月「南京の市街は儀鳳門を入りて遠く南方の一隅に構成されて居る。馬車は儀鳳門内の獅子王山砲台を左に見て進む。唯だ見る茫々たる廃墟、田畝の間に点在する古刹人の訪ふなく、明朝全盛時代大廈高楼の跡は、荒草離々として残礎徒らに当年を語るに過ぎない。」【史料 28】p.210

1922 年春～夏「下関の町から獅子山を左に見て馬車は先づ儀鳳門を入る。門を入ると恰度通州の南門を這入った時の様に、一面に荒れ果てて、耕された圃のほとりには楊柳の並木が茂って居る位なものである。城内と言っても田舎道を行く様な気がして少からず豫想を裏切られた。やっと朱塗の壁鮮かな鐘鼓楼まで来ると、街路は少し坂になって居るけれども、幾分か人家も増して城内らしくなる。」【史料 32】p.158

やはりこれまでと同様の「田舎道」「廃墟」「田畝」という印象が目につく。旅行者は南京到着前にその繁栄を予期していたのだが、意外にも目にしたのは広大な空地であった。以下の【史料 41】は城内にあたかも東京駅・丸の内一帯に広がっていた「三菱が原」のような空間があることに驚いている。

> 1925 年 3 月「周囲三十二哩に亘れる壮大なる城壁は、私達の眼を驚かした。車站に降り立った私達は、車夫の重囲を突破して辛くも馬車を賃し得た。私達は先づ領事館へと走らせた。我が東京駅のまだ築造されなかった以前の三菱原、私は彼の青草萋々たりし光景を今の南京に見て、この古き都の廃頽のさまを窺った。巍峩たる城壁は是等の曠野の大部分を包囲してゐるのであった。到るところ断礎と敗瓦、そこに昔の繁華の蹟を見出した。」
> 「三菱原のやうな広い野原を持つ南京の城内、その東と南と西の三面はまことに繁華な町であった。月に浮るる市民の遊行は実に袖を連ねて幕を作す底の雑沓であった。私の自動車はその町を走った。そして或る一廓の、やや物静かな町に入った。車の停まったところは乾浄屋らしい大きな門の入口であった。これが秦淮の酒家であった。」【史料 41】pp.60, 67

ただし次の 1923 年の旅行記からは、鼓楼から西北方面においても建物が建ち並び始めている様子を見ることが出来る。

> 1923 年 5 月「南京懐古　南京に入る　下関の市街を脱けて郊外と為り、南京の城内迄は一里以上もある。……。沿路は道こそ大きいが、まるで、田舎の国道を往くやうなものである。尤も江寧鉄路があるが汚くて乗れぬといふ話だ。田圃には麦の穂が出て、蚕豆が売ってゐる。確に五月の空である。日本なら鯉幟の青嵐に靡く頃である。城下の士族屋敷のやうな所をぬけて、城内に近づくが、処々に、「前門番煙」とか、「仁丹」などの金看板が大々的に威張って居るのは愛嬌だ。三牌楼車站の辺から、官庁などが少々見え、無量庵車站から町らしい家並に為る。左の小丘に北極閣を極み、鐘鼓楼あたりから繁華な商業市街と為る。成賢街を過ぎて、一番賑かな目抜の大通りと為り、堂々たる大小の商舗が軒を並べ、重々しい金看板がズラリとブラ下って居るところは支那街の特色で、繁華な気分を漂はしめる。」【史料 35】p.244

下関から城内に入ると田舎道が続く。先述の通り 1910 年代には既に官庁が建ち並び始めていた。この記事からは、その官庁街をさらに進むと旧博覧会会場近くの無量庵駅の辺りから市街地になっていること、その先の鼓楼から向こうが繁華街となっていることが読み取れるのである。

このように城内の西北部、下関と鼓楼を結ぶ街道沿いの一帯にはいまだ広大な空間が残っているとは言え、次第に市街が形成されつつあることが見える。ここから城内を更に進

めば南部、西部、東部に繁華街があった。南部についてはこれまでも言及される南門大街、三山街の一帯、西側は水西門の城内側を指している。この旅行者は秦淮河の酒家で遊ぶが、その辺りを「やや物静かな」と表現している。この東部の市街の具体的な場所は分からないが、恐らく西華門より西側、大行宮から南、中正街へといたる範囲を指すのだろう。だが次の【史料 37】によればその街区のすぐ北側、市の中程にある石板橋周辺は「極めて淋しい」田舎町であったと言う。

> 1924 年 8 月「下関から城内に入るには西北の儀鳳門から入るのであるが、城内馬車で一時間程の間は平坦な道路であるが、左右農圃ひらけて全く郊外の気分である。……。楼〔※鐘鼓楼〕からさきは市街らしい体裁になるが何分荒廃の跡で一向ひき立たぬ。石板橋の宝来館につく。館の附近は極めて淋しい田舎町で、鍛冶屋が一軒目に入る位の程度であるが、日本人の観光客は皆ここに来る。」【史料 37】pp.61-62

1920 年代半ばの南京市は東、南、西において繁華街が形成されているのだが、賑やかな街区と街区の間に寂れた様相の地区も見られた。同時期の各地の情況は 1925 年刊行のガイドブックである【史料 38】に詳しい。この史料は当時のガイドブックであるために旅行年・調査年は判明しない。出版年である 1925 年を数年遡る可能性があるが、1920 年代から大きな隔たりはないと考えられる。この史料は長いのでいくつかの部分に分けて検討することとする。

> 1925 年以前「城内は長髪賊の乱に依って殆んど全部烏有に帰したが、今日では大約三分の一を恢復して居る。而し南門及水西門附近を除いては官衙、兵営、学校等が多く、住宅は僅に其間に点在して居るに過ぎない。」【史料 38】pp.25-27

続いて述べる繁華街を除けば、城内には官庁、兵営、学校が多く見られ、住宅は少ないという。その繁華街には大略二つの地区に分かれている。

> 「内門前の内門大街〔※南門大街？〕は花市街、三山街と相連り、府東大街、盧妃巷を経て城内の中心に至る新道があって馬車自車を通ずる事が出来る。南門大街を中心として東北に秦淮河、西北に信府河がある。此両河の辺りが城内第一の繁盛地区である。南門大街及三山街約十町の間は両側に商賈多く、繻子、紬等土産の絹織物商店を主とし売薬店、雑貨店等が其次に位する。」【史料 38】pp.25-27

まずは南門大街とその両翼にある信府河と秦淮河の近辺であり、この辺りが最も栄えている。

> 「水西門大街とは、水西門から油市街に至る約十町の間を云ふ。此附近も商業区域と

されて居るが、多くは貿易商か卸商で、南門大街のやうな華さはない。」【史料 38】pp.25-27

続いて城内の西側、上で述べた地区の西北にあたる水西門から油市街の一帯が、第二の繁華街であった。

「中正街は城内鉄道の終点で人馬の往来は比較的多い方であるが、附近は官衙、学校、会館等に占められて商家は極めて少ない。吉祥街は中正街より統督府衙門に至る間にある。近来急速に発展し舶来雑貨の消化は此附近が最も多いとの由である。」【史料 38】pp.25-27

寧省鉄道の終点の中正街は、近年急速に発展してきたところである。先に引用した【史料 41】1925 年 3 月にて言及される南京城内東部の繁華街を指すと考えられる。ここには政府機関、学校等が建てられていた。下関については商埠地が拡大したが、その狭小さが目立つようになった。

1925 年以前「茲に於いて当然の結果として商埠地の狭少を来たしたが、如何せん下関一帯は四辺皆な湿地で、相当の基礎工事を施さないでは家屋を建築することは出来ない。それで商埠局は今其埋立工事に着手して居るが、これとて自ら制限のある事で大なる期待を持つことは出来ない。恐らくは下関の繁盛も近い将来に於いて対岸浦口に奪はるるものであらう。」【史料 38】pp.25-27

結果、長江対岸の浦口がそれに替わって成長するのではないかという。

以上、全体的に見るならば南京国民政府成立直後の南京の様相は次のようにまとめることができる。

1927 年 11 月「南京城壁は東方に向って凸字形を為してゐる。城内の空地は半分余もあらんか、往昔人口百万を有したるものが長髪賊の為に蹂躙せられ、爾来復古するに到らず、今は四十万内外で、今後の盛衰は一に南京政府の運命に係る。」【史料 42】p.105

城内の空間の利用、それを含めた戦災からの復興は、全て南京国民政府の都市計画に委ねられたのである。

Ⅳ　おわりに：1927 年以降南京国民政府下の南京へ

1927 年 3 月、国民革命軍は南京に入城した。この北伐の過程において市街は再度戦禍を被った。

1928 年 8 月「下関（シャーカン）駅から約一里にして南京の街に到着する。直ちにその旅館を尋ねに廻はったが、運転手が案内したのは、どうも夫れらしくないのでおかしく思うと夫れは医者のうち、之れではなゐと更に他を尋づねあぐんだが、跡形もない、成る程さうだ――　……　此の南京事件〔※1927 年〕である。此事件に累せられて、かの宝来館は焼討の運命に遭逢したものと知れた。」【史料 43】pp.23-24

事件の詳細はさておき、この戦乱で石板橋にあった日本人の定宿、宝来館も焼失したという。その後、4 月 18 日に南京は首都となる。そして南京国民政府の下で所謂“南京の十年”が始まり、我々のプロジェクトが研究する土地調査事業も本格的に実行される。この時期の南京市街の様相については機会を改めて考察したい。南京国民政府下の建設については【史料 43】【史料 44】【史料 45】からその片鱗をうかがい知ることが出来る。

ここまでの考察により、清末には南京城内は鼓楼以北が全くの空白であったこと、加えて辛亥革命によって西部の江寧満城近辺が破壊されたことが分かった。その時点での市街は鼓楼より南、城内西南部に拡がっており、三山街や南門大街あたりが最も繁華であり、水西門がそれに次いでいた。秦淮河のあたりは下町の風情であった。本文中には触れなかったが、日本人の旅行記には秦淮河の画舫で遊ぶ記述が多く見られる。

清末から 1920 年代にかけての時期に南京市の様相が大きく変わったようには見受けられない。ただし 1920 年代に北部、下関から鼓楼にかけての路沿いに領事館や政府機関が建設されつつあること、これに加えて中山街のあたりも発展してきたことが看取できるが、一方で南京市街には広大な空地が遺されていた情景もうかがえる。我々の対象としている地区は、戦禍を逃れ、家屋が残存していた一角にある。土地調査事業においてこのような空地の広がる一帯などはどのように処理されたのだろうか。これについては比較考察をする上でも、将来的に検討せねばなるまい。

補遺　谷崎潤一郎の見た南京旧市街：1918 年 10 月

谷崎潤一郎に「秦淮の夜」という作品がある。「私」が南京城内の秦淮に妓女を求めるという筋書きであり、芥川龍之介の短編小説『南京の基督』にも影響を与えたことで知られる。小説とも紀行文ともとれる性格から、本稿では史料としては採用しなかったが、この文章の下地には谷崎が大正 7 年（1918 年）10 月南京訪問時に得た見聞がある。その南京市街の描写は、その中に多少の虚構が含まれるにせよ、1910 年代の雰囲気を反映していると考えられる。作品に次のような下りがある。

俥は盧政牌楼の四つ角を左へ折れて、いよいよ暗い淋しい路へ這入って行った。両側に大きく壁の剝げ落ちた煉瓦塀が聳えて居て、それが何遍も何遍もヂグザクに折れ曲って居る中を、俥も同じやうに折れ曲りつつ走って行く。どうかすると、両方から壁が我々を挟み打ちにしさうに迫って来て、もう少しで壁に衝き当りはしないかと危ぶ

【図 C　最新首都城市全図】

まれる。こんな所で置き去りにでもされたらば、私は一と晩かかっても宿屋へ帰れやしないだらう。壁が盡きてしまふと、今度はぽこりと空地がある。それが四角な壁と壁との間に、歯が抜けたやうな工合に拡がって居る。さうして焼跡の如く瓦礫が磊磊と積み重って居たり、沼とも古池とも分らない水溜りになって居たりする。すべて支那の都会には町の真中に空地のあるのは珍らしくもないけれど、南京には殊に多い。

昼間通った肉橋〔※内橋？〕大街の北の方の堂子巷の近所なぞには、沢山の水溜りがあって、鵞鳥が何匹も泳いで居たくらゐであった。こんなところが旧都の旧都たる所以であるかも知れない。

「秦淮の夜」1919 年（『谷崎潤一郎全集　第 6 巻』中央公論社、1967 年より）

陽も落ちた街を人力車が行く様、城内の入り組んだ細い路地、その両側に家屋の壁が連なり、その切れ目に突如、瓦礫の積み重なった空地――南京には殊に多いという――が姿を現す。この後、「私」は中国人の案内人につれられて秦淮へと入り、中国料理を味わった後、妓女を求めてさまようのである。

この記述の中、特に注目に値するのは街中に散らばる空地の存在である。本ニューズレター所収の拙文「再訪磨盤街 : 1953 年出版『南京市五百分一房地産平面図』の現場を歩く」でも述べているように、1930 年代から 50 年代にかけての我々のフィールドには空地をかなりの頻度で見ることができる。その点在する様は、まさにこの「秦淮の夜」の情景と一致していると筆者は感じている。

参考資料

史料１　旅行年不明（1890-92年の見聞）

日清貿易研究所編纂『清国通商綜覧』丸善商社書店、1892年

p.68「……。周囲殆んど十四里、人口凡そ四十万とす。其郭壁の高さ五丈より七丈に至る。外部に城壕あり。総て明の洪武年間に於て創建する所に係る。其規模広大民物繁盛の地たり。然るに咸豊年間長毛賊の占領する所となり、為めに城内三分の二は殆んど荒蕪に帰したりしも、近年左宗棠総督となり、大に家屋を建築せしめ人烟更に増加し来り。……。」

pp.69-70「……。其市街は家屋の構造閑雅にして佳良の市店多く縐緞、絹帛を製する。特に精工なり。又書肆帛舗の大なるものあり。元来文華風流の地にして文人墨客の此地に住するもの甚だ多し。且該府は本と華麗なる屋宇、寺院ありしが、兵燹を経て烏有に帰せり。磁製塔の如きは、其形八面八稜にして九層を重ね高さ二百六十一尺あり。外面は覆ふに五彩の磁板を以てし、遠く之を望めば彩虹の如し。内に螺階ありて頂上に至るべし。此塔は元と東晋簡文帝の創建する所にして、明の成祖之を再建し、十九年の星霜を経て落成せしもとの云ふ。燹灰となりしは惜むべし。……。」

史料２　旅行年不明（1894年以前の見聞）

髙橋謙『支那時事』嵩山房、1894年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第3巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.16「……。咸豊以来久しく長髪賊の僭拠する所となり、市街悉く兵火に罹り荒蕪残破して昔日繁華の光景なかりしが、今や漸く稍旧観に復せり。彼の世界七奇観の一と称せられたる報恩寺の磁塔も寺と共に賊の毀壊する所となり、今烏有に帰し、唯瓦石堆裏に其跡を留むるのみ。」

史料３　**1895年12月旅行**

『清国新開港場視察報告』京都商業会議所、1897年

pp.230-231「……。然れども咸豊年間長髪賊の久しく割拠する所となりし為め、城内三分の二は其焚掠する所となり、爾来頗る荒廃に属せり。曩に総督左宗棠の任に就くや大に家屋を建築し城壁を修理し漸く面目を一新せりと雖ども、尚未だ旧時の壮観を恢復すること能わず。」

史料４　**1899年3月旅行**

教学参議部編纂『清国巡遊誌』仏教図書出版株式会社、1900年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第14巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.115「……。有名なる大報恩寺の磁製塔の如き、明の成祖の建立する所にして、八角八稜九層あり、五綵燦爛として人目を眩するばかりなりしと云ふも、惜しむ可し髪賊の乱悉く灰燼に附し、今は僅に遺墟を止むるのみ。」

史料５　**1899年11月旅行**

内藤虎次郎『支那漫遊　燕山楚水』博文館、1900年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第4巻、ゆまに書房、1997年所収

p.164「……。南京が帝都の実を失へること四百余年、加ふるに近歳長髪賊の大乱を経たれば、城内は荒れに荒れて、馬路の両側にだに人家の聯続せるは罕れに、田疇竹樹、犬牙交錯して、村落の間を行くが若し。本願寺に至る一路、唯だ鼓楼の衢に当りて壮大空を衝くのみぞ、往事帝都の名残なるべく覚えて、其の附近には北極閣の寂しげに立たる下に、西欧宣教師の住宅特に目立て見えたり。聞く城内の市街の形を為せるは全面積の四分の一には過ぎざるべく、城の内外なる民屋を合せたりとも城内の三分一を填つるに過ぎざるべしと。されば周九十六清里、其の規模の大は北京にもまされる大都も現在人口十五六万を逾ずといふ。其の荒涼想ふべし。」

p.165「この日午下、農商務三井の留学生達に伴はれて南京の最盛市街たる三山街あたりを観たり。科巷よりは亦半里程もあるべし。一二骨董店など観了りて、学堂に帰る。翌十七日朝は杉山平岡二君に導かれて、考陵に詣づ、路は照心橋を渡りて西華門より内城に径

す。内城は明の故宮の在りし処にして、今は駐防八旗の居る所たり。髪賊の乱後、荒廃を極め、頽垣修めず、御溝空しく流留る。……。」

史料６　旅行年不明（1900-02年の見聞）

藤戸計太編『子江:支那富源』 同文館、1902年

p.124「市街は現在僅かに西南の一少角を占め、全面積の大半は田園或は荒蕪の地多し。而して西壁と揚子江との間は濠渠養魚地相連なり、其一濠は揚子江より西門に達し又壁に沿うて其南西隅に至る。本府は歴代の帝王の都となりしこと永かりしを以て建築の美燦然人目を奪ひ実に天下の壮観なりき。然れども彼の長髪賊入城せし以来昔日の壮華を競ひし幾多の建築物は皆な兵燹に係り荒廃に帰し更に旧観を止めず。嘗て名を世界に恣にせし磁製塔の如きは其形八面八稜九層を重ね高さ二百六十一尺外面を覆ふに五彩の磁板を以てせり。これ元の東晋簡文帝の創建する所にして明の成祖之を再建し十九年の星霜を経て落成せしものなりしも、此時に至り完く破壊され今は僅かに破瓦の草間に埋没するあるのみ。其後西暦一千八百九十四年長髪賊より恢復したる後ち直ちに総督官府の所在となり、曾て張之洞来りて江蘇総督となるや大に弊政を革め道路を修築し稍々旧観を復するに至れり。」

史料７　旅行年不明（南京在住、1901年前？）

高木銑次郎「南京近状一斑」（『東邦協会々報』81、東邦協会、1901年所収）

p.92-93「馬路は今を隔る七年前始めて下関（揚子江岸汽船発着の処）より起り、城の北東部を通しても市に到る約二里余の間開通せられ、爾来城内の要所に通ずる道路は可成改築の計劃を以て工事を継続し、今日既に開通せる場所尠からず。下関より城内に通ずる幹道は路傍植ゆるに柳樹を以てし幅約四間坦々として車馬を駆るに便なり。今夏長江氾濫の浸水を蒙り数カ所の破壊を見るに至りたるも、目下減水と共に修理に着手しつつあれば、其復旧遠きにあらざるべし。蓋外人の初めて支那に来るもの其道路の粗悪に驚かざる稀なり。而して南京の如き開港以前に於て而かも居留外人少く随って其刺撃多からざるべきに早く既に馬路の開通を見る。寧ろ意外の感無き能わず。聞く七年前今の湖広総督張之洞が両江総督の署理たりし時巨額の資金を費やし此工事を起したるものなりと云。」

p.93「……。然れども長毛賊の乱十一年の久しき其占拠する所と為り、害を蒙ること最も多く市街の大部分は為めに兵燹に罹り、爾来又旧時の盛に復する能わず。現今の市街は僅かに城廓内西南の一角を占め、他は荒原若くは田畝と為りて存するのみ。嚮昔金陵の壮観として天下に有名なりし磁製の塔の如きも今は唯破瓦断磚を留めて往事を忍ばしむるに過ぎず。其他明の故宮、明太祖の墓陵等著名の古蹟少なからざるも多くは皆荒廃に帰せり。」

史料８　旅行年不明（1901-02年頃の見聞）

山口昺『清国遊歴案内』石塚書店、1902年

p.43「城壁は高さ五丈より七丈に至り、下部の厚さ三丈とす。外部に城濠あり。総て明の洪武年間に於て創建する所なり。元来此都は旧帝都たるを以て、其規模広大にして甚だ繁盛の地たりしが、咸豊年間長髪賊の占領する所となりしを以て、一時其の三分の二まで荒蕪に帰せしと云ふ。然れども有名なる左宗棠が総督たりしとき大に家屋を建築せしめ、人煙更に増加するに至れり。」

史料９　1903年10月旅行

一宮操子『蒙古土産』実業之日本社、1909年

p.72「城内には数多の広大なる建物あり。総督衙門、布政使衙門、糧道、塩巡道、江寧府、洋務局、江南機器局、銀元局及び各国領事館等を、其重なるものとす。其他に学校の重なるものは、陸師学堂（総教習独逸人）、水師学堂（総教習英人）、練兵学堂（総教習支那人）、練将学堂（総教習日本人）、工芸学堂（総教習支那人）、三江師範学堂（総教習日本人）、格致書院、江南高等学堂（総教習日本人）、金陵東文学堂（総教習日本人）、省師範学堂等にして、外に金陵病院、貢院等大建築物と称せらる。貢院は進士の試験場にあつる建物にして、其構造頗る広大なりとす。

貢院の内部は是非共一見せましき考へなりしも、当時試験の済みし許りにて、調査の結了する迄は、一切人の入るを許さず、門には堅く封印をさへ施したり。さらば止むなしと、同行の人々うち連れて帰る。途すがら何としもなく心平かならず、ある人の門の封印もさる事ながら、心の封印をこそ望ましけれと云へるに、実にと思はれて、いと可笑しかりしが。其年の受験者は総数二万に余りぬとぞ聞きぬる。」

史料１０　1906年7月旅行

徳富猪一郎『七十八日遊記』民友社、1906年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第15巻、ゆまに書房、1997年所収）

pp.178-180「……。記者は明の故宮を経、其の附近の民屋が断礎廃甎によりて出来つつあるを見て、其の一片が、大いなる且つ多くの物語を、含有する事を感じ候。……。小生等は南京到著の当日、孝陵の寝門の閣上に立ち、其の南京を取り囲む二十幾清里の城壁の中に長髪賊兵火後、僅かに其の一隅に復活したる南京を眺め。……。」

史料１１　1908年12月旅行

小林愛雄『支那印象記』敬文館、1911年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第6巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.72「この近くにある北極閣は今軍隊の駐屯する処だが、ここに昇れば眼界は前より更に広い。揚子江に遠く霞んで海のやうに、思ひさま水を湛へて居る。ここから見ると南京の市街の無暗とだだびろいのが知れるのである。……。」

史料１２　**1910年5月までに旅行**

内山清・梶原熊雄編『南京』日本堂、1910年

pp.19-20「……。然るに今より半世紀以前長髪賊の兵乱起るに及んで九夷八蛮の占拠する所となり、十余年間無規律なる横暴の下に、富豪は掠奪を被り良民は四方に奔竄し、全市兵火の為めに荒廃に帰し、数百年来の繁栄は一朝にして零落せり。髪賊の平定後茲に四十余年、城内約四分の一は再び人家を以て充たすに至りたりと雖も、旅行者若し南京港に上陸し馬車を駆りて城内に進まば数哩の間田畝竹藪相交り瓦礫累々として、実に寰外の概あるを見る。詩人此地を以て京都の秋色に奈良の古色を加味したりと云ふも過言にあらざるなり。

然れども最近数年間南京に於ける進歩発達は著しく、滬寧城内の二鉄道が完成は交通上の至大の便宜を与へたるのみならず、道路の改修、警察の設備等面目を一新せり。将来電燈水道の設備成り津浦鉄道完成の暁は長江岸に於ける重要商港たるに至るべし。」

史料１３　**1910年8月旅行**

佐藤善治郎『南清紀行』良明堂書店、1911年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第18巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.80「城内の中央の稍高き地に鼓楼高く聳えて城内を一望すべく、これは立派な遺物である。鼓楼の北は田舎の有様で、樹木多く、その一部に南京博覧会が設けられたのである。……。」

p.83「此由緒ある都府が現今の如く寂寥となりしは、全く長髪賊の乱によるのである。……。」

p.84「……。戦争と不規律の割拠とによりて燦然人目を奪ひし大建築物も皆兵燹に罹って旧観を留めず。彼名を世に轟かせし、高さ二百六十一尺の八面九層の磁製塔（東晋簡文帝創建　明成祖修理）も此時全く破壊せられて、今は唯叢間に破片を索むるのみである。」

pp.86-89「進んで大城郭の儀鳳門に入る。……。

城内に入れば、街路は平坦で、幅四五間ある。全く田舎の景で、楊柳高く両側を蔽ひ、又竹藪などもある。……。

やがて左方に博覧会場が見える。又城内鉄道の列車の通過するのを見て、柳の並樹の路

を進めば、城内の中央の稍高き地に大なる鼓櫓のある処に出た。その高さ十数間左右六七十間。三つの洞門があって、その上に二層の城楼がある、全城内を見渡すべく。その昔の俤を偲ぶに足る遺物である。その右隣の地に、略落成したる大厦が日本領事館である。……。

鼓櫓の次は、支那風の市街をなして居る。併し上海旧城内よりも稍広闊で、道幅が三間位ある。総督の居る都府であるからであらう。商家が表に高き柱を立て、之に看板（牌）を幾段にもかけるなど珍奇である。車上で看板を読みながら行くになかなか興味がある。」

p.90「進むに従ひて、官吏の居宅多き処に入る。官吏の邸宅には福州劉公館（福州出身の官吏劉氏の家の意）などと記し、四面皆石垣を廻らし、その中に家を構へてある。遂に中正街の日本領事館に至る。時に午前八時。茲は市街の中央ではあるが、総督の官庁（督署）に近くて、官吏の邸宅多く、東京の山の手の趣がある。領事館は樹木蓊鬱たる中にある。下関より二里。……。」

pp.91-92「午後は内山氏と同行する積りであったにが、急に公用が出来たので、一人で博覧会見物に出懸けた。督署の停車場を指して出発す。……。

車行一里余で、博覧会前に下り、之より直ちに博覧会に入った。此博覧会は本名を南京勧業会といふ。……。」

pp.94-95「……。かくして場内〔※博覧会場内〕で三四時間を経過し、東北方面を見んとして東側門から出でんとして、門を出づるや、銃剣つけたる兵士が五六人進み出でて予を取囲んだ。言語不通であるから何事か起ったかと驚いた。予は地図を示して行くべき方面を指示した。彼等は皆引さがった。多分予が田舎の方面に向はんとしたから、道を誤って門を出づるものと考へて注意して呉れたらしかった。偖これから全く田舎の景色である。猛犬が道を遮って吠ゆるのには辟易した。風物自ら寂寥で、心細く感じた。竹藪など多き処を通り、五六町で大城郭に出た。茲に豊潤門といふ近頃開いた門がある。……。」

pp.100-101「日没近く旅館に帰れば、内山書記生が待って居られた。晩餐を共にして、夫れから車を列ねて博覧会の夜景を見るべく出発した。……。博覧会西門前の新設模範市街は、或上海富豪の建てたるもので、幅十五間許の道路の両側に、四五町間立派なる市街がある。非常に雑沓して居った。……。」

p.115「莫愁湖は不忍池の二倍許の湖である。……。暫にして楼を出でて腕車に乗り、水西門を入る。此辺は南京繁華の中心にて、大厦両側に聳え、肩摩轂擊の有様である。……。」

pp.116-117「秦淮河は、秦の始皇帝が東巡の時、望気者の言を用ゐ、王気を洩導するために掘り割りたりと伝へらるるもので城内を通じて居る。幅は僅かに十間内外であるが、料理店青楼などその両側に並び、画舫とて、彩色し幔幕を張り彩燈をつるしたる遊船が多く

茲にある。……。」

史料１４　**旅行年不明（1906年以降中国在住、1910年執筆）**

宇野哲人『支那文明記』敬文館、1918年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第8巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.309「鐘鼓楼は南京城の中央に在る。長髪賊の乱に兵燹にかかってから、市街は南方にのみあって遂に復旧せず、楼は今市街の北端に在る。……。」

p.311「南京城の東、満城を横ぎり満洲将軍衙門を過ぐれば、附近一帯には隴圃の間に残礎累々として居る。……。」

史料１５　**1912年8月旅行**

前田利定『支那遊記』民友社、1912年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第17巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.42-43「……承る処に依れば周囲九十六清里十三門、外域は百八十清里十六門有之由にて、其規模の雄大なる誠に王者の地たるにふさはしき大都に候へ共、長髪賊の兵燹に罹りたる為めか荒蕪を極め、北部四分の三は恰も村落の間を行く如く、田園樹林連亘して所々に燈光の点々と見え都城の中を行き居るの感無之候。……。」

p.50「革命の兵火　江寧将軍として時めきたる鉄良の住みしといふ衙門は革命の鉄火を浴みて一樹一木をも残さず焦土に帰し、唯土塁残壁の寂然として崩れ立つのみに候。威を江南に振ひたりし将軍衙門に続きて八旗の将士の家居したりし士族町今将た何処にかある。栄枯定めなきは世の常とは申し乍ら儚く感ぜられ申候。」

p.58「下関とは南京城外揚子江畔の地方を申すにて、南京唯一の商埠に御座候。戸数は二千に近く人口一万を超ゆる由に御座候。南京城門は午後九時より午前六時迄閉鎖せらるるを以て南京に来往する旅客は此の地に宿泊し、或は乗船入城の便を計らざるべからざるよりして多数の旅館料理店などあるは勿論のこと西洋雑貨を営む店など年々に殖え、十年前に比すれば頗る繁盛を来せるものの由、将来津浦鉄道完成の暁には滬寧津浦両鉄道旅客貨物の接続地として益将来は繁栄に相成なるべくと想像致され申候。浦口は長江を隔てて下関と相対し人口は六千許りもありて商業稍殷盛の趣に御座候。……。」

史料１６　**1912年10月旅行**

中野孤山『支那大陸横断遊蜀雑俎』六盟館、1913年（小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第17巻、ゆまに書房、1997年所収）

p.29-30「……。其建築物は燦爛として美を尽し、人目為めに奪はるる実に天下の壮観を極めてゐた。中にも磁製塔の如きは、其の高さ二百六十一尺、九層をなし八面八稜に作られ,外面を覆ふに五彩の磁板を以てし、世界に二つとない天下の雄物であった。惜いかな、天下の壮観を極め、世界に其の名を恣にした、幾多の建造物は長髪賊の兵禍に罹りて烏有に帰して、旧観は存してゐない。ただ破壊された瓦片が草間に埋没するのみ、辛らく旧観を保てるは、城壁だけである。現時の南京市街は、城内西南の一隅に存在し、其他は荒廃してすべて田圃に帰せり。……。」

史料１７　**1913年3-4月旅行**

来馬琢道『蘇浙見学録』鴻盟社、1913年

pp.63-64「……。併しながら、実際の様子を見れば、前に述べたやうに、戦乱の巷となった為め、総ての旧物は破壊されて、又、古を存する無く城壁の中には、山もあり、田もあり、畑もあり、下関と云ふ処から寧省鉄道に乗って、市の中央に往かうとすると、は、恰も平原と云っても可いほどの有様であります。但し、山の形だけは、昔に異なる無く、兎も角も、此処が、何の旧跡であったと云はれれば、如何にもであるかと、又、セメテもの懐古の料に供するやうなことで、何となく豫期に違ふことが多いのであります。……。又、今日では、まだ水道の設けなき為め、水の不潔なのには、大分苦しめられたやうであります。」

史料１８　**1914年8月旅行**

岡田忠彦『南支那の一瞥』瞥眼社、1916年

p.97「前清の時、両江総督の駐在地で、文武大官を置き、陸軍第九鎮此処に駐屯し、又各種の学堂設けられ、政治上の要地で、清初最も殷賑であったが、髪匪の兵燹に罹り、城内大半荒廃に帰し、今日市街を形成せるは西南隅の三分の一許に過ぎない。」

pp.104-105「城内に入れば、直に都城の壮観に接するものと思ひきや、全く蕭條たる田舎の景色で、更に人家を認めない。例の楊柳、道の両側を覆ひ、処処竹林や草澤を見る。特に道の左方は茫茫たる原野で、木の葉越しに宏大なる南京博覧会の廃址が見える。」

p.108「凡そ北極閣から北と西の部分は人家殆ど無く、一面の平野に沼澤が甚だ多い。雨ふれば即ち此等の沼澤が溢れて、一面の海と化するさうで太古は揚子江の水が、今は市中を横断して流れたものと云はれて居る。北極閣山上より南を望めば人家櫛比して城壁内に溢れ、縦横に通じたる溝渠は、如何に運輸の便あるかを想はしめる。此方面兵営あり、学堂あり、官衙あり、皆歴歴として望むことが出来る。又処処の楼台、丘阜、何れも六朝以

来の史蹟ならざるは無く、幾多伽藍の散見するは南朝四百八十寺の盛時を想はしめる。左の方朝陽門内に荒台残礎の散見するは、明の故宮址で、此朝陽門こそ、第二革命に当り、張勲が某国宣教師の力を藉り、城兵をして門を開かしめ侵入した処である。双眼鏡により、朝陽門外石人石馬の駢列するを認めることが出来る。即ち明の孝陵へ到る道である。朝陽門より右、市街の南端なる門が聚宝門即ち南門で、門外には造幣局、火薬局等の煙突を見、更に南して雨花台を望むべく、門内秦淮河に臨める夫子廟の赤い甍を認め、それより少しく眼を右に転ずれば朝天宮が九衢を圧して聳え、甍越しに莫愁湖の水光を望むのである。」

史料１９　1916年1月旅行

守田有秋『瑞西より』日吉堂本店、1918年

pp.2-4「楊樹の並木の続いて居る道を一路南に進むと其処に南京の街がある。私達は、街に続く寂しい道を南へ南へ進んだ。此道は清朝時代の総督張之洞が築造したのだと聞いて居るが、両側には所々に大きな建物を見るきりで、殆ど村落を行くの感がある。

水師学堂や、独逸領事館を右に見て二十丁も行ったと思ふ頃、私達は赤く塗った旧い楼門が小高い丘の上に聳えて居るのを見た。宿のボーイに聞けば、それは、明の時代の鼓楼だと云ふ。

……。

鼓楼の下を左へ、坂路を登ると、其処に立派な洋館が立って居る。それは日本の領事館である。……。

私達は少し後へ引返へして、鼓楼と相対した丘の上に聳えて居る北極閣に登った。此の陵は、城内の最も高い所であるが、第二次の革命に革命軍の死守した新戦場の跡だと云ふ事だ。今は支那兵の駐屯所となって居る。

此処から眺望すると、南京城内は殆ど一眸の下に集って来る。東の方に玄武湖及び紫禁山が脚下に見えるかと思へば、獅子山砲台は北の方に黒く聳えて居る。縦令、兵燹に罹ったとは云へ、南京の街に未だ未だ小さくはない、波の如く起伏する百千の甍の間に、所々赤い煉瓦や白亜の壁の見えるのは、確に洋人の住居である。所々に大きな屋根の見えるのは此処の官衙や寺院である。」

pp.4-6「それから二十分程して後、私達の小さな馬は、狭い南京の街をカタカタと蹄を鳴して走って居た。皮を剝いた豚の首や、赤むけの野鴨の吊してある店先や、揚げ物のいやな臭のプンプンして居る煙の中や、苦力の蠢蠢群って居る雑閙やの間を、逃るやうにして駆け抜けて、西安門を入り、午門を右に見て、明の故宮の跡へ来た。これは、明の太祖の紫禁城のあった跡で、今は、僅かに其の巨大な礎石と、円柱のあった後を残して居るのみで、行人をして、坐に心を傷ましめるものがある。……。

故宮の附近には、つい近頃まで満洲八旗の住って居た無数の屋敷と、鉄良将軍の宏壮な邸宅があった相である。所が、それすら、今日は唯累々たる瓦石の、彼方に一塊、此方に

一塊、山をなして居るきりである。」

p.10「狭い南京の街を慌だしく駆け抜けた私達の車は、賑かな秦淮の岸まで来てひたと止まった。此処から先は、車を進めることの出来ない程雑閙を極めて居る。
　街の両側には、食物を売る屋台店や、縁日商人の小さな店がぎっしり詰って居る。……。」

史料２０　**1917年11月旅行**

　徳富猪一郎『支那漫遊記』民友社、1918年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第6巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.216-217「南京は予が十二年前の曾遊時に比すれば、更らに再度の劫運を経たり。第一革命の際には、張勲堅守の後、革命軍に占領せられ、新政府は此処に其基を定めたり。第二革命に際しては、馮国璋に攻略せらる。……。但だ市中荒涼の情態は、遠客の一瞥にも、容易に看取せらる。」

pp.220-221「予が十二年前、孝陵に遊びたる節は、轎に乗りたれども、今は馬車にて陵下迄来るを得たり。是れ一に民国政府の賜也。革命後の成績としては、道路の修理を以て、第一に措く可きが如し。
　但だ明の宮闕の故趾に密集したる満城、即ち満洲旗人の部落は、今は見る影もなく畑となり、唯だ断瓦廃磚の、道傍に狼藉たるを見るのみ。是れ実に第一革命の際に、破壊せられたるものと云ふ。……。此の荒涼、破壊の中に於て、独り明の太祖の孝陵のみは、先づ十二年前の通り也。……。」

p.226「……。然も貢院の一半は、已に壊廃して、圃となり居れり。他の一方も、恐らくは数年を待たざる可し。」

史料２１　**1918年4月旅行**

　諸橋轍次『遊支雑筆』目黒書店、1938年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.114-115「鶏鳴山を下りて町に這入った。陶文毅公、林文忠公の祠堂などが途中にある。督軍署の側から左へ折れて、西華門をくぐると一円の曠地へ出た。方半里もあらう。今は悉く焦土となって、残るは累々たる礎石瓦磚のみである。今次第一革命の時、満人に対する漢人の恨が遂にこの兵火を齎したのだとのこと。鳥飛んで下らず、獣走って群を失ふと曰った古戦場の有様が、なまなましい姿に於て眼前に現れた。
　……。
　この辺引きもきらず一輪車が動いてゐる。疳高い車輪の響は耳をつんざくばかりである。

車上に載せて運ぶものは、いづれも宮址の旧い磚であって、中には麗しい当年の文字を刻したものもある。大さは縦尺半、横五六寸、厚さ三四寸もあるだらう。かかる麗しい大磚が今は不通の煉瓦同様市場に送られて建築に用ひられるのだと思ふと、支那の歴史が片はしから切り売りせられるやうな気持がして、いたいたしさに堪へられぬ。」

pp.119-120「……。殺風景な宿の一室に閉ぢ籠もって、つくづく南京の現状を頭に浮べてみたが、映ずるものは只荒廃と荒蕪と丈である。秣陵の昔、金陵の昔は曰はずもがな、清朝の末、張之洞の学問地として一時教育の中心地となったその俤さへも今は見ることは出来ない。革命に続ぐに革命を以てした。その革命は常に破壊であった。破壊のあとは荒廃である。壁といふ壁、石といふ石、悉く打碎かれて今は見るよしもない。」

史料２２　**1919年1月旅行**

上塚司『揚子江を中心として』織田書店、1925年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第11巻、ゆまに書房、1999年所収）

p.107「……。此の城廓こそ、明太祖洪武年間の経営にかかるもの、周廻九十六支里（二十二哩）高五十尺より七十尺に及び、門を設くる事十三、北京城と共に現存城廓の雄である。然れども其後数次の兵燹により、今や城内多くは荒廃に帰し、南門街、三山街等西南の一隅を除くの外、雑草離々、風物粛條として転た行人を愁しむ。」

史料２３　**1919年5月旅行**

細井肇『支那を観て』成蹊堂、1919年

pp.82-83「予等はかつて明の宮闕たりしといふ廃墟の中を進みぬ。剰されたるは唯城門のみ。城門の楼閣は長髪賊以来屢次の兵燹に破壊し尽されて今は其影を止めず。路傍に蓬々たる雑草宛ら〔※宛も？〕櫛けづらざる髪の如く、旧城址一圓は荒廃のままに委棄せられ、閣宇殿堂の跡とおぼしく、縦横に劃されたる礎石の露はなるあたり、焼残りたる断瓦廃磚の黝ずみたるが堆く狼藉を極む。景状一として心目を惨ましめざるはなし。」

p.85「隧道の如き朝陽門を過ぎりて仰ぎ見れば、城壁には第一次第二次革命当時の弾痕歴々たり。外濠は、大半水涸れて雑草に埋まり、土饅頭、路の左右に累々として大凡十数丁に亘る。是れ皆革命戦に戦しせる者の墳墓なり。」

史料２４　**1919年7月旅行**

東京高等商業学校東亜倶楽部『中華三千哩』大阪屋号書店、1920年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第10巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.109-110「……。東に高き紫禁山は昔の姿をその儘に、周囲二十二哩、高さ四丈乃至五丈、十三の城門を有する、都を囲んだ大城壁は今に残れど、四百余州の珍石奇木を聚め、名工巨匠の粋を尽して、その壮麗と豪華を誇った宮殿は、此地を本拠として十三カ年に亘った長髪賊の戦乱に、殆んど煙滅せられ、僅か災禍を免れた其片影も、孫黄対張憑〔※勲？〕等の第一及第二革命の為めに灰燼に帰し、今は只その跡に建てられた粗末な洋館の中に、明の忠臣方孝孺の血石碑だとか、故事ある古磚や碑石、或は銅器、井筒石の如きものが少許保存され、屋宇のない巨大な楼門が風雨に曝され、驚く程に大きな大理石の礎石が路上に横はって居るのみだ。そして遊子を傷ましむる累々たるその残礎破塀も、心なき附近の人民の崩壊して使用するに任して居るから、果して何時迄か残ることであらう？」

史料２５　**1919年10月旅行**

那波利貞『燕呉載筆』同文館、1925年

p.219「此の通過する諸街衢市肆相当に軒を比ぶる処もあり、江南故都の市井、又自ら北京のそれと趣を異にする。漢西門は南京城の西門に在りては北より儀鳳門、定淮門と算へて第六の門に当り第七の水西門と共に西壁屈指の城門なるが、門内は市井相当に熱閙を呈せるも、門外は忽ち郊村の風物甚だ田舎趣味に富む。此の市街の殷賑を他処に見て一向馬車を漢西門外に駆らむと企つる我等はそも何れの地をか目的とする。」

p.232「水西門、正しき呼称に於ての三山門より城内に入り、南京城中の大道なる油市街を楚北会館前より一文字に東進し徒門橋を渡りて行口大街、黒廓大街を通過し、茲に南折して三山街を南下し、東晋の画家顧愷之の旧居に近き花市街の北角より義興巷に出で、徐に民家の状態を察しつつ武定橋畔にて秦淮に沿ひ始め、東北に向って夫子廟前東牌楼の附近に到達した。此の辺は秦淮中にても有名なる画舫の集まれる処にして、……。」

p.256「明代の貢院は長髪賊の兵火に失せ、今のものは同治三年の修築に係り、元は二万六百四十四の号舎、亡慮二万人以上の受験生を収容し得たりと謂はるれば、此の長屋型の長棟は本来は二百棟以上も存在したる筈で、之が行はれずなりて後漸次取り毀たれ、現に其半部分の受験生を収容すべき棟々は今や悉く売り払はれて居る有様。」

史料２６　**1920年6月旅行**

渡邊巳之次郎『老大国の山河（余と朝鮮及び支那）』金尾文淵堂、1921年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第14巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.282-283「荒廃の惨状　然り、北極閣の荒廃固より然り。然れども是驚くべきにあらざるなり。驚くべきは南京其ものの荒廃のみ。余の未だ南京を訪はざるや、脳中画くところは其繁盛と其雄大と其優美となりき。然りに今来れる処は城内の地たるに拘らず、道路の

両側は竹林のみ、田野のみ、路は坦々たらざるにあらず、路傍楊柳の風に紊るるの趣致なきにあらずと雖も、点々たる家屋の間、農桑に忙はしきの人多く、之を都市といふべからずして、寧ろ田園と称するの優れるを思はずんばあらず。常に兵乱の中心となり、長髪賊の乱後未だ回復せざるもの、更に清末革命の禍殃に会す。殆ど全都三分の二の廃墟となり、人口三十七万を数ふるに過ぎざるに至っては、衰頽の状、真に驚くべきなり。津浦線の開通、果して能く幾何か其繁栄を回復し且之を増大すべき。」

pp.284-285「明の孝陵　更に東安門を出でて道を朝陽門に取る。市街に接して郊野の連るあり。即ち一の火田にして毎圃の区劃必ず瓦片を積んで障塀となす、火災の後、終に回復するに至らずして麦を植うるに至りたるか、其果して何の為なるかを解せず。之を案内者に問ふ。曰く、此辺一帯これ満洲旗人の邸宅軒を並べ曾て栄華と名誉と勢威との中心たりしところ、武昌一たび革命の旗を掲げて以来、此地亦忽ち其渦中に入り、満人の邸第は悉く破壊せられて一炬に附せらる。此瓦石の積んで堆をなし、農圃の境域を築くものは、即ち当時の遺跡と遺物とのみと。満人の今尚城内に在るもの幾干、果して一人これを過りて『麦秀でて漸々たり禾黍油々たり』を慨歌する箕子の徒ありや。朝陽門を出づれば、全く郊野にして、麦の熟するの傍、西瓜を作くるの多きを見る。……。」

史料２７　**1920年夏頃旅行**

竹内逸『支那印象記』中央美術社、1927年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第15巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.263-264「馬車は儀鳳門を潜る。さて城内だ。と言ってもこの広大な城壁内区域は直ちに市街を形成してゐる訳ではない。郊外景色の中を、柳林に包まれたこの平坦な一條の本道が走ってゐるまでである。下関からの支線なる江寧鉄路も走ってゐる。各国領事館は思ふ存分、樹と草とに包まれ切った広域を占めて点在してゐる。……。

鐘鼓楼が見える。鐘鼓楼と言ふよりも城門のやうだ。だがこの突忽と聳える紅壁造りの鐘鼓楼に依って、南京に於ける初明文化の俤が髣髴する。無論この辺りも曾ては市街であったのだらう。長髪賊剿滅と同時に、兵燹にかかったまま今では、楊柳と村落同様の小街とに囲はれての爪先上りの路を上り詰めた大道支点に建ってゐる。」

史料２８　**1921年5月旅行**

大井風伯『支那三度旅』経済新聞社、1923年

p.210「南京の市街は儀鳳門を入りて遠く南方の一隅に構成されて居る。馬車は儀鳳門内の獅子王山砲台を左に見て進む。唯だ見る茫々たる廃墟、田畝の間に点在する古刹人の訪ふなく、明朝全盛時代大廈高楼の跡は、荒草離々として残礎徒らに当年を語るに過ぎない。……。」

p.212「南京城廓の湯代は北京を凌ぐ。明初に廓大されたものであって周囲約三十二哩と称する。繞らすに高さ約三十尺乃至五十尺の磚壁を以てし、十三の城門を有するが、現下南京に於て最も殷盛なる商業区域は、南京の聚宝門内であって、北部一帯の諸門内は荒廃の址のみである。」

史料２９　**1921年10月旅行**

石井謹吾『満鮮支那游記』外遊叢書・第4編 、日比谷書房、1923年

p.167「……。現在の人口は三十七八万あって市況も相当繁盛ではあるが明朝当年の殷盛の有様は到底今日の南京には其影もない位である。特に長髪賊侵入の惨害や、満漢両族の演出した修羅場であった革命戦の為め、市街中烏有に帰した部分尠からず往昔の約半分位とも云はれて居る。……。」

史料３０　**1921年11月頃旅行**

早坂義雄『混乱の支那を旅して:満鮮支那の自然と人』早坂義雄、1922年

p.246-247「千八百五十年に長髪賊の乱が起るや、遂に賊手に陥され洪秀全が十年間の都城となり官革両軍の激戦地となったが為に市街の大半は焼け市民の生き残りし者は僅かに十分の一で明の宮殿の如きも多く、此時に破壊せられてしまった。洪秀全自殺の跡は今督軍省になって居る。清末の革命に再び其惨害を蒙むり、一時は臨時大総統孫逸仙の総督府の所在地となった所で人口約三十万揚子江岸の開港場でもあり、滬寧鉄道の一端に位し相当に交通も便利で商業も行はれて居る。城廓は明太祖の築造したもので周囲九里高さ四丈乃至九丈十三の門があるが、長髪賊の乱の時兵火に罹かり殆ど旧観を止めないほど荒れ果てて居る。

其上第一革命（明治四十四年十月」の際紫禁山に面する内城外城間の一大市街地であった、満洲人居住の家屋を焼き払ったが為めに、到る処荒涼寂寞、瓦石累々として昔の金殿玉楼の跡は麦や、菜や芋畑と化して転た今昔の感に堪えない。路幅狭く家屋も低くさく、旧態依然として居る。」

pp.257-258「革命夜話　其夜は平和であった。南京を一瞥した眼で革命物語を聞くには誠にふさはしい夜である。Ｔ氏の友人某は南京に居住すること十数年二回の革命にも遭遇し少なからず当地の事情にも通じて居る。宝来館の主人も来訪して南京事情に一夜を明かした。……。此時〔※第一革命〕に城の内外の民屋の兵火に罹かったもの数ふるに暇なく死傷又少なくはなかった。殊に在留邦人の被害は少なからずあったのである。」

史料３１　**旅行年不明（1921年以前の見聞）**

江南健児『新上海:附・蘇州杭州南京案内』訂正増補2版、日本堂書店、1923年

pp.160-161「……爾来明の衰ると共に南京又昔日の偉観なかりしが清朝起りて兵戦の巷と化し、長髪賊起るや亦もや兵禍にかかり太平国都たること十三年城内の勝域挙げて焦土となりぬ。

清末革命の烽火武昌に挙るや南支を扼する要地として早くも争奪の中心となり、清朝位を退けるの後も張勲一人南京によりて孤忠を守りたりしが、遂に夜暗に乗じて逃れ革命全く平静に帰し孫逸仙、民国の假大総統として假政府を此処に建つ。民国三年六月李烈鈞江西にありて第二革命の先駆たるや黄興南京に在りて互に策応し討袁の旗を翻へせしが戦利あらずして海外に兎がれ、張勲、袁の将驍として南京に入り大いに虎勇を振ひ商舗を掠め、良民を殺し、あまつさへ我国旗に侮辱を加へ我国人を殺害するなどの大蛮行を働き、先期に長髪賊の乱によりて荒廃に帰したる南京は更に荒廃を重ねぬ。」

史料３２　**1922年春～夏旅行**

乗杉義久『中華民国に遊ぶ』乗杉事務所、1923年

p.158「下関の町から獅子山を左に見て馬車は先づ儀鳳門を入る。門を入ると恰度通州の南門を這入った時の様に、一面に荒れ果てて、耕された圃のほとりには楊柳の並木が茂って居る位なものである。城内と言っても田舎道を行く様な気がして少からず豫想を裏切られた。やっと朱塗の壁鮮かな鐘鼓楼まで来ると、街路は少し坂になって居るけれども、幾分か人家も増して城内らしくなる。……。それから少時往って天津橋を渡ると、前清時代の満州城の跡で、一面に焦土と化して居り、火山の麓にある焼け石の野を往く様な気がする。……。」

pp.164-165「南門大街から一直線に引き返して、復び鐘鼓楼の方へ戻った。路は狭く両側の人家は低く小さく物質的に南京の市街が如何にも貧弱なることを包み切れずに居る。恐らく明朝の盛んな頃は、こんなものではなかったらふ。其後幾多の兵燹を経て、辛うじて現今の市街が余命を繋いで居るのではあるまいか。『国破れて山河在り』の恨は、最も如実に今の南京を唱って居るものの様に感ぜられる。……。」

史料３３　**1922年11月旅行**

高井利五郎『鮮満支那之教育と産業:最近踏査』広島県立広島工業学校、1923年

p.57「南京条約の締結地、長髪賊の根拠地、中華革命の発生地、孫逸仙の総統府を設けし地等歴史上逸すべからざる地である。随って名所旧跡に富むのみならず長江沿岸沃野を控へ通商港たる上に滬寧、津浦、二線の連絡点とし四通八達の要衝なれば商工業地としても期待多かりしが実際は全然裏切られた感に耐へなかった。我同胞の如きも嘗ては多数在住

せしも今や僅々百余人に減少し、堂々たる高等尋常小学校には生徒僅かに十名内外、日本人宿舎も今は蓬莱館一軒と云ふ寂寞さである。馬車を市内に駆るも恰かも廃墟を行くが如く、宮殿の城壁は屡々兵燹に罹りて共に灰燼に帰し、纔に残存の五龍橋も橋材は傾き半ば溝渠の中に埋没し、満洲旗人の部落は見る影もなく唯残礎断磚の点存するに過ぎぬ。」

史料３４　旅行年不明（1923年以前の見聞）

池田桃川『江南の名勝史蹟』日本堂書店、1923年

pp.63-64「南京を遊覧したる者は誰しも、到る所残礎累々たる古蹟を見て日々頽廃し行く一廃都たるの直感を抱くべし。然れ共商業上より見れば決して然らず。陸は津浦滬寧両線にて天津及上海方面と聯絡し、水は長江に由り漢口上海方面と相通じ、その貿易額の如き一年間二億に達し且つ浦口が近き将来に於て開港場となりた暁に於ては一層の殷賑を呈すや明らかなり。」

史料３５　1923年5月旅行

大屋徳城『鮮支巡礼行』東方文献刊行会、1930年

p.244「南京懐古　南京に入る　下関の市街を脱けて郊外と為り、南京の城内迄は一里以上もある。……。沿路は道こそ大きいが、まるで、田舎の国道を往くやうなものである。尤も江寧鉄路があるが汚くて乗れぬといふ話だ。田圃には麦の穂が出て、蚕豆が売ってゐる。確に五月の空である。日本なら鯉幟の青嵐に靡く頃である。城下の士族屋敷のやうな所をぬけて、城内に近づくが、処々に、「前門番煙」とか、「仁丹」などの金看板が大々的に威張って居るのは愛嬌だ。三牌楼車站の辺から、官庁などが少々見え、無量庵車站から町らしい家並に為る。左の小丘に北極閣を極み、鐘鼓楼あたりから繁華な商業市街と為る。成賢街を過ぎて、一番賑かな目抜の大通りと為り、堂々たる大小の商舗が軒を並べ、重々しい金看板がズラリとブラ下って居るところは支那街の特色で、繁華な気分を漂はしめる。西亜洋行の在る大功坊大街は、南京の町を四分の三も通って、もはや南門に近い、秦淮の盛り場のあたりになるので、こんなに走っては、町をぬけて、又郊外になるのではないかと心配する頃到着した。正に一時間半を費やして居る。」

p.246「孔子廟の後に貢院がある。明の永楽中に建つる所で、近年迄科挙を行うた所であるが、今は大半破壊されて、一部分が残って居る。門銭を払って大門をくぐると、中央の殿堂に続く石階には、痩せこけた雑草が茂って、左右に多くの小房（一房は二坪位で中に仕切があって、幾人も入れるやうに為ってをる）があり、一々千字文の字で番号が附してある。元は二万六百余もあったさうだが、今は見本的に少々残って居るばかりだ。天下の秀才を斯様な窮屈な檻に入れて、試験した昔を思へば、支那も近代化したものだ。」

史料３６　**1924年4月旅行**

前田武四郎『支那の旅』工業雑誌社、1925年

pp.81-82「案内者の柳さんは日本語は可成り達者で、其処此処に立止まっては、慷慨して当時の史話をやる。彼は祖父から時折り聞かされたのださうで、長髪賊の入城当時の惨状は小供心に深く刻んで居ると云ふ。柳さんは語る。……。当時賊軍の堅城に拠って善戦し、却々攻め落す事が出来ず、仕方がないから兵糧攻めにしたが、それでも尚ほ二年半の長い月日を支えた。籠城の間、敵方では自給の一方法として、人家を壊して畑となし、豆を植えたり豚を飼ったりした。……。」

pp.83-84「……。吾々の通った大道の両側但しは目の届く限りの傾斜地には生ま新らしい土饅頭が一面に隆起して居る。之は人を埋めて土をかけてあるので、中には貧弱な墓石を立てたものもあるが、大抵は無縁仏だ。其の新らしいのは革命戦の犠牲者ださうで、古いものは多分長髪賊の時の死骸であらう。……。孝陵からの戻り道、二人は馬車で市中に近づいた。只見る左の彼方には恰も東京の大震火の跡に彷彿たる所がある。区域は凡そ一哩平方の広漠たる破壊の跡である。此処には満漢八旗の人達が凡そ三万人も、北京朝廷の余光で、何百年来住んで居たのであったが、十三年前の革命戦に追出されて了った。可哀相に其時は大変に多くの人が殺されて、退去した人達も家屋敷だの、財産だのと云ふ場合でなく、命からがら逃げたのですとガイド柳さんは尚ほも話を続ける。」

pp.84-85「南京の過去はこんなみじめな話し斗りで、心なき身にも物の哀れをツクヅクと感じさせられる。曾ては人口七八十万もあった時代もあって商工業の殷賑を極め、政治の中心ともなったのだが、戦争の度毎に人口は減少し、町は寂びれた。平和が続きさへすれば回復は早いのだが、さて現在は・・・殖えて居るのやら、減りつつあるのやら分らない。表は平和に見えるけれども、実は乱世のありさまで市民不安の種は歴々と数へられる。……。」

pp.87-88「秦淮はマア南京の浅草だ。孔子の廟を取巻いて見世式の小商人がズラリと陣取り、非常に人出の多い所で、河岸には安料理屋が立並んで、昔ならば三十間堀の船宿とも云ふべき家のあたりに、有名な画舫即ち屋根船が幾十艘も繋いである。……。」

史料３７　**1924年8月旅行**

藤田元春『西湖より包頭まで:支那研究』博多成象堂、1926年

pp.61-62「下関から城内に入るには西北の儀鳳門から入るのであるが、城内馬車で一時間程の間は平坦な道路であるが、左右農圃ひらけて全く郊外の気分である。……。楼〔※鐘鼓楼〕からさきは市街らしい体裁になるが何分荒廃の跡で一向ひき立たぬ。石板橋の宝来

館につく。館の附近は極めて淋しい田舎町で、鍛冶屋が一軒目に入る位の程度であるが、日本人の観光客は皆ここに来る。ボーイも日本語が分かる。案内さして明故宮を訪ねる。街路は蘇州などとは広く、俥で成賢街を南して日本人小学校の前を通り、大行宮街を東すれば三個の穹門よりなる西華門がある。其の中は水晶台といふて八旗兵営の跡であるが、第一革命の兵火で全く荒廃、落ちた煉瓦を拾って貧民が家居し玉蜀黍などを畑に作ってゐる。」

史料３８　旅行年不明（1925年以前の見聞）

上海経済新報社編集局編『長江の旅:揚子江案内』日本堂書店、1925年

pp.25-27「城内は長髪賊の乱に依って殆んど全部烏有に帰したが、今日では大約三分の一を恢復して居る。而し南門及水西門附近を除いては官衙、兵営、学校等が多く、住宅は僅に其間に点在して居るに過ぎない。内門前の内門大街は花市街、三山街と相連り、府東大街、盧妃巷を経て城内の中心に至る新道があって馬車自車を通ずる事が出来る。南門大街を中心として東北に秦淮河、西北に信府河がある。此両河の辺りが城内第一の繁盛地区である。南門大街及三山街約十町の間は両側に商賈多く、繻子、紬等土産の絹織物商店を主とし売薬店、雑貨店等が其次に位する。水西門大街とは水西門から油市街に至る約十町の間を云ふ。此附近も商業区域とされて居るが多くは貿易商か卸商で南門大街のやうな華さはない。中正街は城内鉄道の終点で人馬の往来は比較的多い方であるが附近は官衙、学校会館等に占められて商家は極めて少ない。吉祥街は中正街より統督府衙門に至る間にある。近来急速に発展し舶来雑貨の消化は此附近が最も多いとの由である。

下関は儀鳳門外一帯を指して云ふが、最初商埠区域として定められたのは、秦淮河以西江岸に至る極めて狭隘な範囲で地積僅に百余畝に過ぎず、而も何等の設備も施されて居ないので外国商人の多くは居住不可能を理由として城内に居を構へ、支那当局も亦それを黙認して居た。然るに民国元年、共和政府の成立するや、南京府知事は布告を発し、宣教師以外の外国人に城内の土地家屋を貸与することを厳禁したが、其告示は少しも行はれないで今日尚ほ外国人は城内に於いて、土地建物を自由に借用して居る。滬寧鉄道が開通して下関に其停車場を設けてから停車場を中心として旅館、運送店を始め城内大商店の支店或は出張所が新設せらるるやうになり、更に津浦鉄道が開通し下関の対岸浦口が其終点となってから山東直隷等北支那の貨客を吸収することが多くなり、又一方には河港の設備を改善して船の繋留、貨物の揚げ卸に便宜のやうにしたので、出入船舶の頓数は年々増加し、共に下関の発展に加速度を与へた。茲に於いて当然の結果として商埠地の狭少を来たしたが、如何せん下関一帯は四辺皆な湿地で、相当の基礎工事を施さないでは家屋を建築することは出来ない。それで商埠局は今其埋立工事に着手して居るが、これとて自ら制限のある事で大なる期待を持つことは出来ない。恐らくは下関の繁盛も近い将来に於いて対岸浦口に奪はるるものであらう。」

史料３９　**1925年5月旅行**

服部源次郎『一商人の支那の旅』東光会、1925年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第20巻、ゆまに書房、1999年所収）

pp.295-296「……、市中に入り日本領事館に敬意を表し、直ぐ西に走り明の故宮に行く。城壁の高さ五十尺、周囲三十二哩、明の太宗が七年の歳月を費して建築せしものである。其後数回の兵火を蒙り、今や到る処其残礎の累々たるをみるのみである。」

史料４０　**1925年5月旅行**

堺貿易会編『南支視察団誌』堺貿易会、1926年

pp.33-34「南京は支那南方の政治都市にして明朝時代には其の帝京たり。城壁の周囲は九十六支里＝日本の十六里＝あり。明の滅亡と共に其の偉観を失ひ、清朝起って兵戦の巷と化し長髪賊の乱また兵火に罹り太平国都たりしこと十三年､城内の勝区は全部焦土となり、其の盛時にありては所謂土一升金一升の繁華を誇りたるも現今にては無代にても土地を求むる者なしと、栄枯盛衰真に甚はだしといふべし。

南京の人口は約三十九万二千と称せられ在留外国人は約二百五十人、其の内日本人は約百二十人なるが、経済的勢力は遠く英米人に及ばず常に其の後塵を拝しつつあるは遺憾なり。日本人小学校は居留民団の経営にかかり現在生徒十六人、一カ年の経費は四千円にして其の半額は外務省の補助する処なり。」

史料４１　**1925年3月旅行**

遅塚麗水『新入蜀記』大阪屋号書店、1927年（小島晋治『大正中国見聞録集成』第19巻、ゆまに書房、1999年所収）

p.60「周囲三十二哩に亘れる壮大なる城壁は、私達の眼を驚かした。車站に降り立った私達は、車夫の重囲を突破して辛くも馬車を賃し得た。私達は先づ領事館へと走らせた。我が東京駅のまだ築造されなかった以前の三菱原、私は彼の青草萋々たりし光景を今の南京に見て、この古き都の廃頽のさまを窺った。巍峩たる城壁は是等の曠野の大部分を包囲してゐるのであった。到るところ断礎と敗瓦、そこに昔の繁華の蹟を見出した。……。」

p.67「三菱原のやうな広い野原を持つ南京の城内、その東と南と西の三面はまことに繁華な町であった。月に浮るる市民の遊行は実に袖を連ねて幕を作す底の雑沓であった。私の自動車はその町を走った。そして或る一廓の、やや物静かな町に入った。車の停まったところは乾浄屋らしい大きな門の入口であった。これが秦淮の酒家であった。」

史料４２　**1927年11月旅行**

北条太洋『支那遊行記』北洋社、1928年

p.105「南京城壁は東方に向って凸字形を為してゐる。城内の空地は半分余もあらんか、往昔人口百万を有したるものが長髪賊の為に蹂躙せられ、爾来復古するに到らず、今は四十万内外で、今後の盛衰は一に南京政府の運命に係る。」

史料４３　1928年8月旅行

中田守仁 述『支那視察に旅して:上海、蘇州、杭州、南京』中田守仁、1928年

pp.23-24「下関（シャーカン）駅から約一里にして南京の街に到着する。直ちにその旅館を尋ねに廻はったが、運転手が案内したのは、どうも夫れらしくないのでおかしく思うと夫れは医者のうち、之れではなゐと更に他を尋づねあぐんだが、跡形もない、成る程さうだ――　……　此の南京事件〔※1927年〕である。此事件に累せられて、かの宝来館は焼討の運命に遭逢したものと知れた。日暮れて道遠しといはふか、夜に入り旅宿に困却の態、日本領事館にすがって見やうといふので、言語不通の自動車運転手を督励して、同館へかけつけた。」

pp.27-29「現在の南京は国民革命軍の事実上の首都であるけれども、首都を移したのではなく、之から建設するのだと、彼等は豪語してゐる位であるから、北方で北京首都説が抬頭すると南方は全部黙殺で通す。国民政府はコンナ具合で、京津占領後、間もなく首都北京を廃して名を北平（ペイピン）と改めて了った。恐らく未来の倫敦、巴里を夢みて居るのだらうが、一旦荒れにあれ、荒れ果てた太平天国の都が何時復興して、東洋の大都市となるか前途遼遼たるものがあらうから、今は矢張り現名江蘇省の江寧府と呼むだ方が適当であるかも知れない。市内を歩いて見たが、先年予が一遊を試みた当時よりは大にひどい。国民政府設立以来旧態依然だといふ人のあるのも尤もと首肯せられる。行人の眼にとどまるものは外面の色あげ丈け、大城壁は各所をペンキで塗りつぶして、曾ては種々の革命標語が張出されてあったといふが、各商品の宣伝広告が可成り目を惹く。予が曾遊の経験を懐想して大した都市的進展は認められなかった。変更のあったのは国民政府前に大道路が能きた丈けだといふ人の説が当ってゐるやうだ。」

pp.28-29「前記揚子江岸の下関には幾棟ともなく新様式の洋館が聳えて見ゆる。江上に浮ぶ船舶から一眸の裡に入れた南京城は輪奐の美を誇る大建物を以て充たされた近代的都市の面影が窺はれるが、一歩城内に踏み入れたら、それこそ案外、大統領の職袁世凱に移りて政府も北京に移動、民国三年第二革命には黄興此の地に拠って討袁の旗を飜したが、戦利あらずして海外に亡命、張勲亦南京に入り暴虐、続いて最近の南京事件。周囲は延々三十二哩、高さは三十尺乃至五十尺、悉く黒煉瓦を以て築かれた大城壁の中三分の二は狐狸の巣窟も啻ならず、城壁一角の市街は陋屋櫛比、道路はデコボコの石畳に馬車、黄包車、

最近ウントふえ出した自動車の群、おし合ひひし合ひ、砂塵を飛ばし、怒鳴声の連発、都会といふも余りに喧噪な、命も、肝も縮まるの外はない。特別市制が布かれてゐるといふけれども、いづこに其の「特別」の意味が現はれて居る。といふのか、夜中の市内も暗らい。屋内も闇らい、夫れも其の筈電燈電力は殆ど総て政府で費消され、不足となって民間には均霑しない。五燭光が恵まれる位ひが関の山「特別市」とはコンナものかとの感を禁じ得なかったのである。」

pp.30-31「南京特別市は以前述べたやうな現状だが、市長の劉紀文は曾ては日本にも留学したこ〔と〕のある新人だといふが、首都建設の意気込も素晴らしいやうに聞いた。

首都建設の規模も亦夫れに応はしいもので、政府の許可を得てゐるのは、五カ年計劃で、其の経費五千万元、其の中一千五百万元は政府支出、残余は全国各省の負担、其の事業の中第一着手に属するものは道路の建設で、下関から中山墓のある紫禁山下に至る五十里（支）幅は八十米突（四十余間）の大道路、今年は二十間幅丈けを完了して、明年一月一日より故総理孫文の大葬儀執行に際し遺霊を迎へる迎大槻道に間に合せる予定だといふ。第二着としては、公園の建設と秦淮河の浚渫といふことになってゐて、玄武湖は公園として開放せられる事になり、浚渫が終れば両岸に樹木を移植して美しい公園とする計劃があり、紺屋の立退、湯屋の移転命令など営業にも制限が加へられてゐる。其他の都市計劃で市民は一時の不利不便に小言ばかり並べてゐると聞いた。

新建設といふ事になると、右述べたやうな五千万元ではロクなことは能きず、五億十億とかけねば駄目だらうが、差当り電燈が明るくなり、水道が出来て清水を口にするやうになったり、市区改正で道路が良くでもなれば、市民は無上の福祉とせねばなるまいと云ふ者もある。」

史料４４　**1929年5-6月旅行**

近藤達児『新支那旅行記:附・孫文移霊祭之記』田口書店、1929年

pp.55-56「南京が首都と定められた以来、現在の荒廃したる南京を立派なものにするといふので先づ五千万円を都市計画事業に投ずる事になって居る。……。都市計画の事業は現南京特別市政府の市長である劉紀文氏が当って居る。氏は我法政大学の出身で英国の剣橋大学にも遊んだといふ潤達な三十七歳の壮者である。総ての人々が首都建設の大事業は深く氏に信頼して居る様子である。都市計画の大綱や市政の現況などを尋ねて見たが未だ実際には整然と法規や計画が立って居らぬのである。兎に角南京の都市計画は新都市の建設と同様で下水でも水道でも道路でも皆新規に始めると異りないのである。今日迄支那で行ひ来った都市計画なども随分乱暴な遣口で、人民の権利などといふ事はあまり念頭に置かず遂行して来たのであるが、此南京の都市計画も矢張同じ様に行はれ居る様である。即民家に立退移転を命ずる場合には僅に五圓の移転料を支給するのみで、期限が来ても移転しない場合には強制執行を遣る。場合に依っては本人を逮捕し家財を没収する事もある。日

本の様に営業に依り家屋に依り差等などは付けず一律一体であるには驚く。……。」

史料４５　**1929年6月頃？旅行**

後藤朝太郎『支那民情を語る』雄山閣、1930年

p.3「確に今日の南京では雲雀や鶯の歌ふ自然の春の音は聞かるるが例の秦淮の呼物、商女の歌に画舫の音曲と云ったものは法度で禁ぜられ昔から南京の花と歌はれた流蓮荒亡の游興気分など今は八釜しく封じられてしまった。されば或る意味から云って、今の南京城は本当に充実した真剣味の首都だとも云へるであらう。都城を背景に国民政府の輪郭は大分決まりかかって来た様だが、革命の功未だ成らず、広西に河南に暗雲低迷し湖南の地方尚も又寝返りの心配があると云はれてゐる。」

pp.3-4「今政府要人の標榜せる所のもの又当局として実現せんと努力しつつある所のものから南京の新面目を窺って見れば、随分その旧来と変わったものが数へられる。その鋭意新首都の施設に努力せるものの意外に多いことは云ふを俟たぬが単にその市中を瞥見して気付いたものだけでも例へば
一、晴天白日旗を掲げた処を多く見ること
二、中山服のユニフォームを著た軍兵を多く見ること
三、中山道路の土木を竣工させたること
四、国民政府の役所の看板を各所に見たること
などが即座に数へられる。……。」